

博士学位論文  
要約

パズル課題と動画に対する子どもたちの行動

—日本，中国，韓国の子どもたちの違い—

**Children's behaviors when solving puzzles and watching videos**  
**—Differences among Japanese, Chinese and Korean children—**

聖心女子大学大学院文学研究科

人間科学専攻・博士後期課程

2020年3月

Jiahui Fu

(指導教員 川上清文)

## 目次

第1章	問題	1
1.1	西洋と東洋	1
1.2	子どもを対象にした研究	2
1.3	大人を対象にした研究	8
1.4	まとめ	13
第2章	研究の構成と目的	16
第3章	パズル課題における日中の子どもたちの行動「研究1」	17
3.1	要約	17
3.2	予備実験	17
3.2.1	実験方法	17
3.2.2	実験の設計	18
3.2.3	研究倫理	18
3.2.4	3歳女兒	18
3.2.4.1	手続き	18
3.2.4.2	結果	19
3.2.5	2歳女兒	20
3.2.5.1	手続き・結果	20
3.2.6	考察	20
3.3	本実験	22

3.3.1	目的	22
3.3.2	方法	23
3.3.2.1	実験参加者	23
3.3.2.2	装置	25
3.3.2.3	手続き	25
3.3.2.4	分析方法	26
3.3.2.4.1	カテゴリーの作成	26
3.3.2.4.2	コーディングの仕方	28
3.3.2.4.3	信頼性	29
3.3.2.5	研究倫理	29
3.3.3	結果	29
3.3.3.1	全体の行動の相違	29
3.3.3.2	二つ目のパズル	31
3.3.3.2.1	カテゴリーの比較	31
3.3.3.2.2	各項目の比較	32
3.3.3.2.3	上下2パーツで表情を詳しく分析した結果	34
3.3.3.3	3つのパズルを始めた時の行動の比較	36
3.3.3.4	パズルが終わった時の行動の比較	37
3.3.3.5	3つのパズルの難易度についての回答	39
3.3.3.6	発話の内容	40
3.3.4	考察	44
3.3.4.1	全体の行動の違いについて	45
3.3.4.2	難しいパズルにおいて	45

3.3.4.2.1	独り言	46
3.3.4.2.2	自ら助けを求める	46
3.3.4.3	表情について	47
3.3.4.4	易一難一易の順番	48
3.3.4.5	課題が終わった時の行動	48
3.3.4.6	課題の難易度についての回答	49
3.3.4.7	発話の内容	50
3.3.4.8	性差について	51
3.4	課題と展望	52
第4章	パズル課題における韓国の子どもの行動「研究2」	53
4.1	要約	53
4.2	目的	53
4.3	方法	54
4.3.1	実験参加者	54
4.3.2	装置	55
4.3.3	手続き	55
4.3.3.1	4歳児	55
4.3.3.2	3歳児	56
4.3.4	分析方法	56
4.3.4.1	カテゴリの作成	56
4.3.4.2	コーディングの仕方	57
4.3.4.3	信頼性	58

4.3.5	研究倫理	58
4.4	結果	58
4.4.1	全体の行動の相違	58
4.4.2	パズル2について	59
4.4.2.1	カテゴリーの比較	59
4.4.2.2	各項目の比較	59
4.4.3	パズル1とパズル3を完成した時間の比較	60
4.4.4	3つのパズルを始めた時の行動の比較	60
4.4.5	パズルが終わった時の行動の比較	61
4.4.6	3つのパズルの難易度についての回答	61
4.4.7	3ヶ国の子どもたちのデータの比較	62
4.5	考察	63
4.5.1	全体の行動の違いについて	64
4.5.2	難しいパズルにおいて	64
4.5.3	パズル1とパズル3を完成した時間の比較	64
4.5.4	3つのパズルを始めた時の行動の比較	65
4.5.5	課題が終わった時の行動	65
4.5.6	課題の難易度についての回答	65
4.5.7	3ヶ国の子どもたちのデータの比較	66
4.6	追加実験	67
4.6.1	問題・目的	67
4.6.2	方法	67
4.6.2.1	実験者・実験協力者・場所	67

4.6.2.2	手続き	67
4.6.2.3	研究倫理	67
4.6.3	結果	68
4.6.3.1	3つのパズルにおいて、全体の比較	68
4.6.3.2	二つ目のパズルにおいて、カテゴリーの比較	68
4.6.3.3	二つ目のパズルにおいて、各項目の比較	68
4.6.3.4	3つのパズルを始めた時の行動	68
4.6.3.5	3つのパズルの難易度についての回答	68
4.6.4	考察	69
第5章	動画鑑賞における日本，中国，韓国の幼児の行動の比較「研究3」	70
5.1	目的	70
5.2	方法	71
5.2.1	実験参加者	71
5.2.2	手続き	71
5.2.2.1	装置	71
5.2.2.2	手続き	71
5.2.3	分析方法	72
5.2.4	信頼性	72
5.2.5	研究倫理	73
5.3	結果	73
5.3.1	動画をみている程度について	73

5.3.2	行動について	74
5.3.3	動画1における行動の違い	74
5.3.4	動画2における行動の違い	74
5.3.5	動画3における行動の違い	75
5.3.6	3つの動画における行動の一貫性	75
5.4	考察	76
5.5	今後の課題	78
第6章	概括	79
	引用文献	84
	謝辞	99

# 第1章 問題

## 1.1 西洋と東洋

従来の文化心理学では、西洋と東洋の比較という視点が数多く取られてきた。

例えば Jack, Sun, Delis, Garrod & Schyns (2016)は、情動表出の研究でこれまで使われて来た、6つの「基本的情動」という定義が妥当であるかどうか検討するために、西洋（英国）と東洋（中国）の大人を対象とした実験を行った。情動的単語の評定法を用いた実験などに基づき、基本的情動は4つであるという結論を導いている。

また韓国の研究者 Lim (2016)は展望論文において、「喜び」や「怒り」などの高覚醒(high arousal)な情動を西洋では評価するが、東洋では「穏やか」や「弛緩した」のような低覚醒(low arousal)な情動を評価する、とまとめている。

そして、Miyamoto, Yoo, Levine, Park, Boylan, Sims, Markus, Kitayama, Kawakami, Karasawa, Coe, Love, & Ryff (2018)は、社会経済的地位(socioeconomic status)と自己志向との関係を西洋（米国）と東洋（日本）などで調べた。西洋でも東洋でも社会経済的地位は自己志向と関係するが、東洋では他者志向とも関係するのに対して西洋では関係しないことを示している。

以上のように東洋と西洋を比較する時、日本または中国が「東洋」の代表として使われ、欧米の国と比較されることが多い。恐らくそれは Markus & Kitayama (1991)が自己観と社会の関係において、西洋文化(A)と日本を含む東洋文化(B)に分けた理論の影響を受けているからである。Markus & Kitayamaは Figure 1-1のように西洋文化(A)では、自己は他者から切り離されているが、東洋文化(B)では、自己は他者と根源的に結び付いているという前提に立っている。



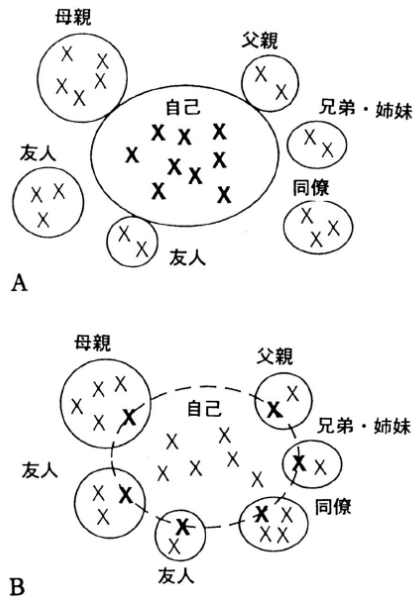


Figure 1-1 文化的自己観の概念図:相互独立(A)と相互協調(B)

(Markus & Kitayama, 1991)

## 1.2. 子どもを対象にした研究

まず Markus & Kitayama (1991)論文以前のものも含めて、これまでなされてきた数多くの研究の例を対象別に分類すると以下のようなになる。まず子どもを対象にした研究について概観する。

Caudill & Weinstein (1969)は日本人とコーカサス系アメリカ人の出生後3, 4ヶ月の乳児とその母親の関係を観察により比較した。日本人の乳児は発声などの活動が少なく、アメリカ人の乳児と比べておとなしかった。

Bornstein は、一連の乳児と母親の日米比較研究(Bornstein, Miyake, & Tamis-LeMonda, 1987; Bornstein, Tamis-LeMonda, Ludemann, Tal, Toda, Rahn, Pecheux, Azuma, & Vardi, 1992)を通じて、日本の母親は乳児の注意を自分との関係に向けるが、アメリカの母親は乳児の注意を外部に向けることを示した。

Fogel, Toda & Kawai (1988)は母親と乳児のフェイストゥフェイス (face to face) コミュニケーションを分析した。日本とアメリカの3ヶ月児と母親の行動を比較したところ、アメリカの乳児の方が多く笑ったり、発声したりした。アメリカの母親は乳児の顔に自分の顔を近づけたり、声を上げたりした。

Camras, Oster, Campos, Miyake, & Bradshaw (1992)は、日本とアメリカの乳児を対象にして軽く腕を拘束した時の反応を比較した。アメリカの乳児の方がネガティブな反応が早い場合もあるが全般的に日米の差はなく、表情の普遍性が示された。

Lewis, Ramsay, & Kawakami (1993)は、日本人とコーカサス系アメリカ人の乳児が予防注射を受ける場面を比較した。日本人の乳児は注射の時にあまり泣かないが、ストレス・ホルモンであるコルチゾルは上昇した。一方、アメリカ人の乳児の泣き方は大きいですが、コルチゾルはあまり上昇しなかった。

Kawakami, Takai-Kawakami, & Kanaya (1994)は、日本人の乳児とその母親と日本に在住しているアメリカ人の乳児とその母親を生後1年間、縦断的に観察した。アメリカ人の母親の乳児への語りかけや接触は日本人の母親より多かった。乳児と母親の相互交渉もアメリカ人の方が多かったが、縦断的にみていくと大きく変化していることが明かであった。

Zahn-Waxler, Friedman, Cole, Mizuta, & Hiruma (1996)は日本とアメリカの幼稚園児を実験場面で比較をした。子どもたちは絵を見せられて、その時どう行動するかを聞かれた。アメリカの子どもは怒りや攻撃的な行動を日本の子どもよりも多く示した。

Chen, Hastings, Rubin, Chen, Cen, & Stewart (1998)は行動の抑制 (behavioral inhibition)について検討し、2歳の中国の子どもたちはカナダの

2歳児より抑制しやすいことを示した。カナダの子どもたちの行動抑制は母親の罰傾向と正の相関があり、賞賛とは負の相関があった。中国の子どもたちの行動抑制は逆で、母親の受け入れる態度と暖かさとは正の関係で、拒否と罰とは負の関係であった。

Camras, Oster, Campos, Campos, Ujiie, Miyake, Wang, & Meng (1998)はヨーロッパアメリカ、日本と中国の11ヶ月の乳児の表情を分析した。その3組の中で、微笑と泣きについて分析したところ、中国の乳児の表出が最も少なかった。

Chen, Rubin, Liu, Chen, Wang, Li, Gao, Cen, Gu, & Li (2003)は文化に対する順守さ(compliance)について、検討した。中国とカナダの2歳児を比較し、中国の子どもたちの方が順守的である傾向が高く、カナダの子どもたちの方が文化に対して、抵抗的であった。

Li & Wang (2004)はアメリカと中国の幼稚園の子どもたちに学校で成功する主人公のストーリーについて自由語りをしてもらった。成功に対して、アメリカの子どもたちは知力と主人公のポジティブな感情と大人からの評価を関連させた。中国の子どもたちは社会的評価と他の人を助ける能力を関連させた。アメリカ文化と中国文化における成功と対人認知に関しての重み付けの相違が分かった。

Ng, Pomerantz & Lam (2007)は学童期の子どもに対する親と学校などの教育の仕方の違いについて、調べた。中国の小学生の親は学校で良い成績を取ることを強調せず、悪い成績を取ることを問題にした。アメリカの親はその反対だった。

Garrett-Peters & Fox (2007)は、がっかりした贈り物を受け取った時の子どもたちの反応を中国系アメリカ人(CA)とヨーロッパ系アメリカ人(EA)の子ども

たち（4～8歳）で比較した。EAの子どもたちはCAの子どもたちよりもポジティブな表情を多く示した。

Lewis, Takai-Kawakami, Kawakami, & Sullivan (2010)は、失敗した場面と成功した場面におけるアメリカと日本の幼児の行動の違いについて研究し、失敗した場合には、日本の子どもたちのほうが明らかに恥と悲しみの表情が少ないが評価的てれ (evaluative embarrassment) の表情が多いことを示した。また、日本の子どもたちでは成功した場合で誇りの表情は少ないが、表出的てれ (exposure embarrassment) の表情は多かった。文化が子どもたちの問題解決の時の行動に影響を与えていると考察している。

Suveg, Raley, Morelen, Wang, Han, & Campion (2014)は、アメリカの子ども（7～13歳）55名と中国の子ども（8～13歳）49名とそれぞれの親に質問紙調査を行い、アメリカの子どもたちのほうが多く表情を表出していると結論づけた。コミュニケーションをする時、その文化的な違いも含めて考えるべきと述べている。

Enesco, Sebastián-Enesco, Guerrero, Quan, & Garijo (2016)は就学前の子どもたちが社会的決定する時、反対する人の影響を調べた。中国とスペインの子どもたちを対象にし、先生が意見を述べる動画を見せ、子どもに意見を言ってもらった実験を行なった。スペインの子どもたちはどんな場合でも自分の意見を保つが、中国の子どもたちは違う意見を持っている人がいるかどうかによって変化することを示した。

Fu, Heyman, Cameron, & Lee (2016)は中国とカナダの7歳～11歳の子どもたちに、先生が出た後の先生のオフィスを掃除させ、先生が戻った時質問した。中国の子どもたちには年齢と共に謙虚な行動がみられたが、カナダの子ども

たちにはみられなかった。

Table 1-1 はこれまで述べてきた子どもの研究のまとめである。

Table 1-1 子どもの研究のまとめ

論文名	年	対象者	対象国	概要
1 Caudill & Weinstein	1969	乳児と母親	日米	米国の母子の方がアクティブ
2 Bornstein, Miyake & Tamis-LeMonda	1987	乳児と母親	日米	日本の母親は乳児の注意を自分との関係に向け、アメリカの母親は乳児の注意を外部に向ける
3 Fogel, Toda & Kawai	1988	乳児と母親	日米	アメリカの乳児は多く笑い、発声の時間が長い
4 Camrus, Oster, Campos et al.	1992	乳児	日米	軽く腕を拘束した時、アメリカの乳児の方がネガティブな反応が早いが全般的に日米の差はなし
5 Lewis, Ramsay & Kawakami	1993	乳児	日米	米国の乳児は予防注射に泣く
6 Kawakami, Takai-Kawakami & Kanaya	1994	乳児と母親	日米	米国の母親の方が働きかけが多い
7 Zahn-Waxler et al.	1996	幼児	日米	アメリカの子どもの方が怒りや攻撃的な行動が多い
8 Chen, Hastings, Rubin et al.	1998	幼児	中国とカナダ	中国の子どもの行動抑制は母親の受け入れる態度と暖かさとの正の関係
9 Camras, Oster, Campos et al.	1998	乳児	アメリカ、日本、中国	中国の乳児の表情が最も少なかった
10 Chen, Rubin, Liu et al.	2003	幼児	中国とカナダ	中国の子どとたちの方が順守である傾向が高い
11 Li & Wang	2004	子ども	中国とアメリカ	中国の子どもたちは社会的評価と他の人を助ける能力に関連させた
12 Ng, Pomerantz & Lam	2007	子どもの親	中国とアメリカ	中国の親は良い成績より悪い成績を問題にする
13 Garrett-Peters & Fox	2007	子ども	中国系アメリカ人 (CA) とヨーロッパ系アメリカ人 (EA)	EAの子どもの方ががっかりした贈り物に対してポジティブな表情を多い
14 Lewis, Takai-Kawakami, Kawakami et al.	2010	子ども	日米	日本の子どもは失敗の恥と成功の誇りが少ない
15 Suveg, Raley, Morelen et al.	2014	青少年と親	中国とアメリカ	アメリカの子どもの方が表情多い
16 Enesco, Sebastián-Enesco, Guerrero et al.	2016	子ども	中国とスペイン	スペインの子どもの方が状況に関わらず意見を言う
17 Fu, Heyman, Cameron et al.	2016	子ども	中国とカナダ	中国の子どもの方が自分がやった事に対する謙虚な態度

### 1.3 大人を対象にした研究

次に大人を対象とした研究の例を示す。

Ekman & Friesen (1971) は成人を対象にして有名な研究を行った。アメリカ人と日本人が緊張感を感じる映画を観た後の感情表出を比較したところ、アメリカ人は不快な感情を表し、日本人は不快な感情を表さなかった。

Bond & Tornatzky (1973) は日本人とアメリカ人の大学生に Rotter の I-E Scale (Internal-External Locus of Control 尺度) を答えさせた。この I-E 尺度とは、自分の能力によって、評価が決定する (internal) と考えるか、チャンスなどの外的な要因にある (external) と考えるかを示す物である。日本人の学生たちは米国の学生たちより外的要因によると考えていた。

Shimoda, Argyle, & Bitti (1978) はイギリス人、イタリア人、日本人の大学生にいくつかの表情を作らせ、他者の表情を解読させた。その結果、日本人の大学生と比べて、イギリスとイタリア人のほうが自国人の表情の解読率が高かった。

Heine & Lehman (1995) は非現実的な楽観主義のレベルを調べるために、カナダ人と日本人の大学生に将来の出来事について質問紙調査を行なった。カナダ人は日本人より非現実的な楽観主義を示した。日本人は自己を脅かす出来事に対して、楽観的でなかった。

Kitayama, Markus, & Kurokama (2000) は良い気持ち (good feelings) の体験は主観的な幸福度の核心であることを想定し、質問紙調査を行なった。アメリカの大学生ではポジティブな情動 (positive emotions) 体験はプライドと関係し、日本の大学生ではポジティブな情動は友情に関連していた。

Morling (2000) はエアロビクスの参加者にクラスを選ぶ理由、難しい授業に

対する反応を調査した。アメリカ人は授業参加への便利さなどでクラスを選ぶ。それに比べて、日本人は自分のレベルに基づきクラスを選び、難しい授業の時に一所懸命頑張り、失敗した時自分の能力とクラスのレベルの違いと考えることを示した。

Eid & Diener (2001)は2つの個人主義国家（アメリカとオーストラリア）と2つの集団主義国家（中国と台湾）の大学生に質問紙調査を行った。集団主義国家では感情のバラツキがみられたが、個人主義国家では特に快感情においてバラツキが少なかった。

Heine, Kitayama, & Lehman (2001)は日本とカナダの大学生を対象として、自己評価に関する質問紙調査をした。カナダの大学生は公的に自己を否定するのを避けようとするが、日本の大学生はその傾向はなかった。

Masuda & Nisbett (2001)は文脈背景(context)の影響について、日本人とアメリカ人を対象にして調べた。水の下に石や、魚などが入っているシーンを対象者にみせ、最初見ていた物と後に見ていた物に関して見かたどうか判断させた。日本人はアメリカ人よりも背景と物の関係を多く述べ（例えば、魚だけではなく）、また、後で見た物よりも最初に見た物を多く認識した。

Morling, Kitayama, & Miyamoto (2002)は大学生に環境の影響と環境への適応について、調査した。アメリカ人は影響について多く語り、日本人は適応について多く語った。

Tinsley & Weldon (2003)は民族起源(national origin)による通常 of 衝突に対する羞恥心と復讐行動の相違を調べるため、中国とアメリカ人の MBA コースに参加しているマネージャーたちを対象にして研究した。マネージャーたちに仕事で出会いそうな話を聞かせ、どう反応するのか調べた。中国のマネージャーた



ちと比べて、アメリカのマネージャーたちの方が直接衝突を好むことが分かった。

Tsai, Levenson, & McCoy (2006)は気質要因(temperamental factors)が情動反応へ及ぼす影響を検討するため、50 ペアのヨーロッパ人アメリカ人(EA)とチャイニーズアメリカ人(CA)の大学生カップルの喧嘩中の会話を比較した。CA カップルより、EA カップルの方がポジティブな情動が多くネガティブな情動が少なかった。

従来表情はユニバーサルだと言われてきたが、何種類かのネガティブな表情は東洋人より西洋人により出されている事が分かった。Jack, Blais, Scheepers, Schyns, & Caldara (2009)は表情の読み取り方の違いを検討するため、目の動きを調べた。「恐怖(fear)」「嫌悪(disgust)」の感情に対して、東洋人(East Asian)の実験協力者はずっと目のあたりを見ていたが、西洋人(Western Caucasian)は顔全般の見ていたと報告した。

Henrich (2016/2019)によれば、Hedden et al. (2008)は、ヨーロッパ系アメリカ人とアメリカに居住する東アジア人を対象に線の見え方に対する実験を行った。西洋人は背景を切り離して対象の特性だけを取り出すことが得意であることを、脳活動の比較を通して確認している。

Immordino-Yang, Yang, & Damasio (2016)は中国とアメリカの青年を対象にして、感情と脳の働きの関係を研究した。アメリカ人の方が情動と皮質活動の関連が多かった。

基本的な表情認識は人類に共通する能力だと言われてきたが、最近この共通性は言い過ぎだという実験結果が示された。Yan, Andrews, & Young (2016)は全顔と部分的な顔写真を使い、中国人とイギリス人が表情認識する時の相違を

検討し、全顔写真の時には中国人とイギリス人に差がないことを報告した。しかし、顔の下の部分については自分が属するグループの表出に対する弁別の方が成績がよかった。

Wu, Li, Zhu, & Zhou (2019)は1960年から2008年のGoogleの電子書籍を調べ、中国人とアメリカ人の感情の表現の仕方を調べた。アメリカの本には中国語の本より感情表現が多いが、中国語の本も近年感情の言葉が増える傾向がみられた。

Table 1-2 はこれまで述べてきた大人の研究のまとめである。

Table 1-2 大人の研究のまとめ

論文名	年	対象者	対象国	概要
1 Ekman & Friesen	1971	成人	日米	日本人は映画観賞中不快な感情より快な感情を表す
2 Bond & Tornatzky	1973	大学生	日米	日本人大学生の方が評価に対して外的要因を考える
3 Shimoda, Argyle & Bitti	1978	大学生	イギリス、イタリア、日本	日本人は自国人の表情の解読率が低い
4 Heine & Lehman	1995	大学生	日本とカナダ	日本人は自己を脅かす出来事に対して、楽観的でない
5 Kitayama, Markus & Kurokama	2000	大学生	日米	日本人はポジティブな情動は友情に関連させる
6 Morling	2000	成人	日米	日本人は自分のレベルに基づきクラスを選ぶ
7 Eid & Diener	2001	大学生	アメリカ、オーストラリア、台湾、中国	個人主義国家は特に快感情についてバラツキが少ない
8 Heine, Kitayama & Lehman	2001	大学生	日本とカナダ	カナダの学生は自己否定を避ける
9 Masuda & Nisbett	2001	大人	日米	日本人は背景と物の関係を注目する
10 Morling, Kitayama & Miyamoto	2002	大学生	日米	日本人は環境への適応を強調する
11 Tinsley & Weldon	2003	マネージャー	中国とアメリカ	アメリカの方が直接衝突を好む
12 Tsai, Levenson & McCoy	2006	大人のカップル	ヨーロッパ人、アメリカ人、中国人	喧嘩中EAカップルの方がポジティブな情動が多い
13 Jack, Blais, Scheepers, Schyns & Caldara	2009	成人	東洋人と西洋人	「恐怖」「嫌悪」に対して、東洋人はずっと目のあたりを見ている
14 Henrich	2016	成人	ヨーロッパ系アメリカ人とアメリカに住む東アジア人	西洋人は背景を切り離して対象の特性だけを取り出すことが得意
15 Immordino-Yang, Yang & Damasio	2016	青年	中国とアメリカ	アメリカの方が情動と大脳皮質活動の関連が多い
16 Yan, Andrews & Young	2016	成人	中国とイギリス	顔の下の部分については自分が属するグループの表現の弁別の方が成績がよい
17 Wu, Li, Zhu & Zhou	2019	成人	中国とアメリカ	書籍ではアメリカの方が感情表現が多い

#### 1.4. まとめ

1.2 をまとめてみると、乳児と母親の関係では、アメリカの母子の方が日本の母子に比べ、アクティブに反応することが分かる (Caudill & Weinstein, 1969; Borstein et al., 1987; Fogel, Toda & Kawai, 1988 など)。また、中国と西洋の子どもたちを対象にした研究では、中国の幼児の方が順守行動が多く、社会的評価に注目しやすく、謙虚であった (Chen et al., 1998; Li & Wang, 2004; Fu et al., 2016)。

また、大人を対象にした研究では、日本人は感情の表現や、表情の解読については、アメリカ人と異なっていた (Ekman & Friesen, 1971; Shimoda et al., 1978)。また、東洋人は西洋人よりネガティブな情動を表現せず、ポジティブな情動を多く表現するのが分かる (Tsai et al., 2006 など)。東洋人は西洋人よりも図と地の両方に注目するが、西洋人は地に注目することが分かった (Masuda & Nisbett, 2001; Henrich, 2016)。中国人よりアメリカ人の方が感情表現が多く、直接的である (Tinsley & Weldon, 2003; Immordino-Yang, Yang, & Damasio, 2016; Wu, Li, Zhu, & Zhou, 2019)。

日本では、数多くの「日本人論」が提出されてきたが、マーカスと北山の論文 (1991) によって、全世界を「集団主義」と「個人主義」という2つの文化に分ける視点が出現した (高野, 2008)。しかし、高野 (2008) は日米の集団主義の比較研究の結果をまとめると、以下のFigure 1-2のように、日本と米国の集団主義の強さは同じであることを明らかにした。果たして、東洋人と西洋人を比較するという研究は意味があるのだろうか。

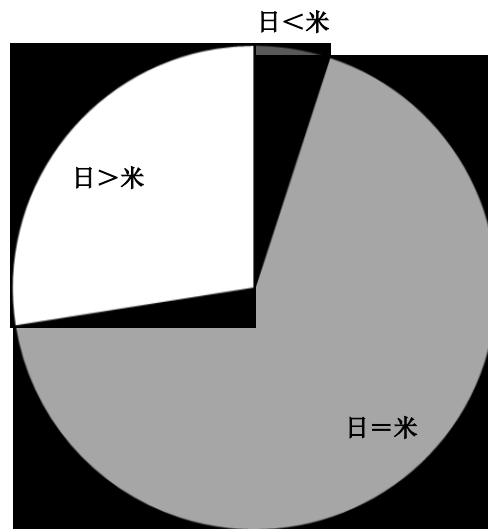


Figure 1-2 実証的研究19件の結果（集団主義の強さ）（高野, 2008）

また、「オリエンタリズム」という言葉がある。これはサイードというアメリカの文学研究者が最初に使ったもので、欧米人がアジアを考察する時によく使われる（高野, 2008）。「東洋」にはよく日本または中国などを代表として挙げられている。例えば, Jack, Sun, Delis, Garrod, & Schyns (2016)はイギリスと中国の成人の表情を比較し, 「Western and East Asian」と表現している。このように東アジアの国は一つのグループとしてみられやすく, 特に日本, 中国, 韓国などは集団主義, 相手に強い関心を持つことが共通点であるとして (e. g., Lee, 2002; Lee & Rogan, 1991; Oetzel & Ting-Toomey, 2003; Ting-Toomey & Kurogi, 1998), 一つのグループでまとめられがちである。同じ東アジアにある国と国の間には違いがないだろうか(藤永, 1997)。さらに, アジアというくくりで扱うことに問題はないだろうか。柏木・北山・東(1997)の『文化心理学-理論と実証』という, 日本における文化心理学の集大成の中にもアジアの国の違いについては取り上げられていない。

東アジアの中の国を一括りにしていいのか，日本，中国，韓国には違いがないだろうか。実証的な研究はほとんど行われていない。本論文では，日本と中国と韓国の子どもたちを対象として研究し，行動の違いの有無を分析する。

## 第 2 章 研究の構成と目的

本論文は、研究 1 から研究 3 により構成される。

研究 1 では、日本の 3 歳児 20 名と中国の 3 歳児 25 名を対象として、パズル課題における行動の出現と特徴の相違の有無を検討する。研究 2 では、韓国の 4 歳児 14 名と 3 歳児 11 名を対象として、研究 1 と同じパズル課題における韓国の幼児の行動の特徴を検討する。すなわち、研究 1 は日本と中国の幼児の行動の特徴、研究 2 は韓国の幼児の行動の特徴に注目し、最終的には 3 ヶ国の子どもたちのデータを用いて、課題を介した国による子どもたちの行動の相違の有無を検討する。研究 3 では、動画に対する、日本、韓国と中国の子どもたちの行動反応の相違の有無を検討する。すなわち、研究 1 と研究 2 は子どもたちの問題解決する際の行動の相違の有無、研究 3 は刺激に対する行動の違いに注目し、3 ヶ国の子どもたちのデータを用いて、子どもたちの行動の相違の比較検討するのが目的である。

## 第 3 章 パズル課題における日中の子どもたちの行動「研究

1」

### 3.1 要約

本研究では神奈川県内にある保育園と上海市内にある保育園の 3 歳クラス児 45 人（日本の子どもたち 20 名，中国の子どもたち 25 名）に 3 つ（簡単-困難-簡単）のパズル課題に取り組んでもらい，この過程をビデオで録画し，分析した。観察した 13 の行動項目は動作，言葉，表情と大きく 3 つのカテゴリーに分けられる。課題に取り組む際の両国の子どもたちの行動の相違を検討した。

課題に取り組む時，日本人の子どもたちより，中国人の子どもたちのほうが (1) 行動回数が多かった，(2) 顔の上パーツと下パーツの動きが多かった，(3) 「自己主張」的な発話が多かったという結果が得られた。また，両国の子どもたちは，(4) パズルに取り組り始める時，両国の子どもたちの行動に違いがあった，(5) 課題の難易度の変化に関する行動が違った，(6) 課題が終わった後の行動に違いがあった，(7) 両国の子どもたちに課題の難易度についての回答に違いがあった。

本研究で得られた重要な結果として，従来，東アジアというひとくくりにされてきた，日本と中国の子どもたちたちの行動に違いがみられたことが挙げられる。文化心理学という分野で，単に東洋というような地域分類により分析がなされてきたことに疑問をなげかける結果であった。

### 3.2 予備実験

#### 3.2.1 実験方法

上海で知人の紹介により実験日の時点で満 3 歳 5 ヶ月女兒 1 名と 2 歳 8 ヶ月女兒 1 名に予備実験として，協力してもらった。2 人とも一人っ子であった。



実験者は筆者自身であった。

### 3.2.2 実験の設計

子どもたちが一人で「できない」という場面において、どのような行動をするかを検討するため、難しいパズル課題を取りあげた。幼児に課題を取り組ませる時、Fisher-Price 製のよう立体的な型はめも使われてきたが、本研究では子どもたちができる課題とできない課題に対する行動の違いを検討することが目的であり、課題の難易度を調整しやすいため、ジグソウパズルを用いた。

また、簡単と難しいパズルの差を比較するために、「簡単なパズル→複雑なパズル」の順に呈示した。難しいパズルで終らせないように、「簡単なパズル→複雑なパズル」の後、もう一つ簡単なパズルを追加した。それは子どもたちが二つ目のパズルで失敗した時生じたストレスを解消するためであった。

### 3.2.3 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し子どもの保護者の同意を得、保育園の園長のサインにより、インフォームドコンセントを得た。

なお、本研究で得られたデータは米国心理学会 (American Psychological Association: APA) の基準に従い、5年間保持された後に破棄される。

### 3.2.4 3歳女兒

#### 3.2.4.1 手続き

中国の3歳女兒に協力してもらい、15ピースパズル、48ピースパズルと24ピ

ースパズルという順で呈示した。実験場所はほかから独立した教室であった。実験者は実験参加者の右側または左側に座った。一つ目のパズル（15 ピース）をまず完成するまで十分な時間を与えた。終わった後，“因为你拼出来了，所请再拼一个（できたので，もう1つどうぞ）。”と言い，二つ目のパズル（48 ピース）を実施した。時計を使い，20分の時間制限を説明した。14分位の時，動きが止まったため実験終了となった。その後，三つ目のパズル（24 ピース）を“那你拼这个吧（ではこれをやりましょう）”と取り組ませた。

実験経過を録画した。

#### 3.2.4.2 結果

まず，各パズルに取り組んだ時間について確認した。一つ目のパズル（15 ピース）は3分10秒掛かり，完成した。二つ目のパズル（48 ピース）は14分間取り組んでいた。三つ目のパズル（24 ピース）は6分8秒掛かった。

一つ目のパズルでは，観察項目（後述）の「眉毛を上げる」が1回，「口を動かす」または「口周りの筋肉の動き」が4回見られた。

二つ目のパズルでは，「姿勢変わる」が2回，「周りを見る」は2回，「眉毛を上げる」が5回，「口を動かす」ことは22回見られた。「独り言」や，「実験者への発話」は見られなかった。

二つ目のパズルの終了時点の結果は Figure 3-1 である。



Figure 3-1 3歳女兒の二つ目のパズルの終了時点の結果

三つ目のパズルのサイズが大きすぎて、動きが多くなってしまったため、コーディングは実施しなかった。

### 3.2.5 2歳女兒

#### 3.2.5.1 手続き・結果

実施した場所は対象児の家のリビングであった。

3歳女兒の時と同じようにパズル課題の説明をし、一つ目のパズル（15ピース）から始めた。

一つ目のパズルに取り組んだ時、8分位でパズルをやめ、母親の所に行き、自分で完成することができなかった。そのため、二つ目のパズルに取り組ませなかった。実験経過を録画した。

### 3.2.6 考察

予備実験の結果から、3歳児にとって、15ピースのパズルを一人で完成できる

ことと、48ピースは10分間以内で完成するのが難しいことの確認ができた。

また、三つ目のパズルのサイズが揃っていなかったため、14ピースのパズルを用意しなおした。

2歳児はパズルに取り組むことがが難しいと判断した。

### 3.3 本実験

#### 3.3.1 目的

同じ東アジアの国日本と中国の子どもたちのパズル課題に対する行動を検討する。

国により、コミュニケーションの仕方が異なっている。Hall (1977) は対人コミュニケーションの仕方と対人関係の特徴により、文脈の読み取り方の違いに着目し、文化を「高文脈文化」(high-context culture)と「低文脈文化」(low-context culture)と分けている。「高文脈文化」とは、コミュニケーションする時、言葉よりも生活習慣、暗黙のルールなど非言語的文脈を重視する文化であり、「低文脈文化」とはコミュニケーションをする際、直接的な言葉が使われている文化である。日本は「高文脈文化」(Nishimura, Nevgi & Tella, 2008)、アメリカは「低文脈文化」で、中国は日本とアメリカの間であるとされる。日本と中国の子どもたちのコミュニケーション仕方は一体どう異なっているだろうか。

Gao & Ting-Toomy (1998)は日本も中国も集団主義文化の国とし、日本語と中国語いずれも間接表現スタイルとコンテクスト中心スタイルがよく使われているが(Gudykunst & Ting-Toomy, 1988)、日本人と中国人のコミュニケーション・スタイルは異なっていると指摘した。張(2009)は、日本と中国の成人のコミュニケーションの中で自己主張の程度が違っているというよりも自己主張の仕方が違っており、日本人の場合、個人差が大きいと指摘している。自己主張とは、「他人の権利を侵害せず、個人の思考と感情を、攻撃的ではない仕方で表現できる能力」と定義されている(Deluty, 1979; 濱口, 1994)。自己主張は生後1年目の終わりから2年目の始めにかけて出現し、3歳ぐらいに顕著に発達していく(e.g. Bruner, Roy, & Ratner, 1982; 柏木, 1988; 木下, 1987; 高坂, 1996;

山本, 1995; 山田, 1982)。早期の自己主張に対する, 文化の影響を検討することが必要である。

第1章で述べたように (cf. Caudill & Weinstein, 1969), 生後3ヶ月くらいの新生児も文化の影響を受けている。幼児の行動には国の違いにより, 違いがあることが考えられる。

日本の子どもと中国の子どもが困難な課題に直面する際に, 動作・表情・言葉の違いがみられるか, また性差はあるのかを確認することが本実験の目的である。

### 3.3.2 方法

#### 3.3.2.1 実験参加者

日本の神奈川県内にある保育園の3歳の典型発達児21人と中国の上海市内にある保育園の3歳の典型発達児27人が実験参加者であった。途中やむをえないことで実験を中止してしまった子どものデータを除いたところ, 有効データは日本の子ども20名 ( $M=3.64$  歳,  $SD=0.26$ ), と中国の子ども25名 ( $M=3.57$  歳,  $SD=0.29$ ) となった。日本は男児10名, 女児10名, 中国は男児13名, 女児12名であった。実験参加児の性別, きょうだいの有無, 実験開始時間と実験時の月齢を Table 3-1 でまとめた (J18, C19, C26 は有効データとして使用しない)。

本論文で用いた「典型発達児」の判断基準は保育園・幼稚園の担任の先生の報告または実験者の観察に基づき, 身体発達や言葉発達等に明らかな遅れやハンディキャップがみられていない子どもである。また, 中国は大陸が大きく, 民族も多い国であるため, 最も多い民族である漢民族の都市の上海に生活している子どもたちを今回の研究対象にした。

Table 3-1 実験参加児の性別，きょうだいの有無，実験時の月齢

対象児	性別	きょうだい (人)	実験時の年齢
J1	男	兄	4歳1ヶ月
J2	女	一人っ子	3歳7ヶ月
J3	男	兄	3歳3ヶ月
J4	男	弟	3歳10ヶ月
J5	女	一人っ子	3歳7ヶ月
J6	女	兄	3歳3ヶ月
J7	男	一人っ子	4歳
J8	女	一人っ子	3歳5ヶ月
J9	男	妹	4歳2ヶ月
J10	女	兄	3歳6ヶ月
J11	男	一人っ子	3歳3ヶ月
J12	女	一人っ子	3歳7ヶ月
J13	男	一人っ子	3歳10ヶ月
J14	女	兄	3歳8ヶ月
J15	女	姉、妹	3歳7ヶ月
J16	男	お腹の中	3歳6ヶ月
J17	男	兄	3歳5ヶ月
J19	女	姉	3歳7ヶ月
J20	男	妹	3歳8ヶ月
J21	女	兄	3歳9ヶ月
C1	女	一人っ子	4歳
C2	男	一人っ子	3歳2ヶ月
C3	女	一人っ子	3歳10ヶ月
C4	女	一人っ子	3歳9ヶ月
C5	男	一人っ子	3歳10ヶ月
C6	女	一人っ子	3歳11ヶ月
C7	男	一人っ子	3歳10ヶ月
C8	女	一人っ子	3歳10ヶ月
C9	女	一人っ子	3歳9ヶ月
C10	女	一人っ子	3歳5ヶ月
C11	男	一人っ子	3歳8ヶ月
C12	女	一人っ子	3歳3ヶ月
C13	男	一人っ子	3歳5ヶ月
C14	男	一人っ子	3歳1ヶ月
C15	男	一人っ子	3歳1ヶ月
C16	男	一人っ子	3歳9ヶ月
C17	男	一人っ子	3歳
C18	女	一人っ子	3歳8ヶ月
C20	女	一人っ子	3歳7ヶ月
C21	女	一人っ子	3歳7ヶ月
C22	男	一人っ子	3歳5ヶ月
C23	男	一人っ子	3歳6ヶ月
C24	男	一人っ子	3歳4ヶ月
C25	女	一人っ子	3歳10ヶ月
C27	男	一人っ子	3歳10ヶ月

(名前の J, C はそれぞれの国籍日本・中国を示し，

数字は実験を行った順番である)

日本人の最年少児は J3 と J11 で、中国人の最年少児は C17 だった。最年長児は日本の J9 と中国の C1 であった。実験参加児全員は実験者と初対面であった。実験者は筆者自身であった。

### 3.3.2.2 装置

紙製の 15 ピースのパズル (Ravensburger Puzzle 製 No. 060207) と 48 ピースのパズル (Ravensburger Puzzle 製 No. 066049) と 14 ピースのパズル (Ravensburger Puzzle 製 No. 060528) を使用した。3 つパズルいずれもパズルボードが付いていた。15 ピースのパズルを完成できたという予備実験の結果により、15 ピースのパズルと 14 ピースパズルを簡単なパズルと定義し、48 ピースパズルを難しいパズルと定義した。

22.8cm x22.8cm の大きさの時計で時間制限を説明した。

録画装置はデジタルカメラ Cyber-shot とデジタル HD ビデオカメラレコーダーHDR-PJ790 (SONY 製) と三脚 (Velbon の cs200) を利用した。

### 3.3.2.3 手続き

実験を実施した場所は独立した部屋であった。同じ部屋にいるのは子どもと実験観察者の二人であった。実験参加者が入る前に実験観察者が録画装置を設定し、スイッチをオンにしてあった。実験観察者は子どもの右側または左側に座り、子どもにこれからやってもらう 15 ピースのパズルを見せ、実験観察者が子どもに“今日はパズルをやってもらいます”“今天要让你拼拼图。”と説明した。実験観察者が発した“どうぞ”“开始吧”という合図で実験を始めた。

15 ピースのパズルができた後、“よくできたので、もう一つやってください”



“因为你拼出来了，所以再拼一个”と48ピースのパズルを見せた。また、時計を使い，“長い針が12から4まで行ったら，それでパズル終了。”“长针从12走到4了，就结束。”と子どもに20分の時間制限を説明した。

実験の予定制限時間は20分だが，子どもに負担をかけすぎないように，子どもから“もうやらない”，“もう終わり”，“我不想拼了”のようなパズルに対してネガティブな言葉が出たら，実験を終了することにした。

48ピースのパズルが終わった後，14ピースのパズルをやってもらった。

すべてのパズルひとつずつが終わった後，子どもにやったパズルは難しかったか簡単だったかと聞いた。

### 3.3.2.4 分析方法

#### 3.3.2.4.1 カテゴリーの作成

Fu (2015)の研究で使用された項目に基き，予備実験の経験も含め，新しい項目も取り入れ，観察する行動のリストを作った。Table 3-2は，本研究で分析する行動とそれぞれの略語を示している。

予備実験で観察された行動，実験者が有意だと考えた子どもの行動を今回の研究で取り上げた。それらの行動を，大きく動作，言葉，表情3つカテゴリーに分けた。各カテゴリーの項目内容とそれらの定義は以下の通りであった。

動作項目は「頭を掻く」，「姿勢崩れ，変わる」，「時計を見る」，「周りを見る」，「実験者を見る」という5項目であった。「姿勢崩れ，変わる」という項目には姿勢の崩れ，立つ，斜めになるなど座った状態から明らかな状態変換が含まれていた。

言葉項目では自分への独り言と実験観察者への発話の大きく2種類に分けた。

また、実験観察者への発話では「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」と「実験者に話掛ける」に分けた。「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」という項目は“これどこ”“这个在哪里”のような疑問文である。「実験者に話掛ける」という項目には“分からない”“我不会”などの自己主張、パズルのやり方についての尋ねる以外の文が含まれていた。

表情項目は「眉間に皺を寄せる」、「眉毛を上げる」、「口を動かす」、「微笑む」、「ため息をつく」という5項目であった。Izard (1979) は、顔の動きを測定する方法 The Maximally Discriminative Facial Movement Coding System (Max) を作り、顔面を「額・眉・鼻根」、「目・鼻・頬」、「口・唇・顎」3 パーツに分け、情動の分析を行っている。Lewis, Alessandri & Sullivan (1990) は MAX を使い、2～8 ヶ月の乳児の認知に関連した表情を検討した。島田・後藤・島田・保坂 (2001) によると、顔面表情筋の発達は部位により発達した時期も異なっている。眉毛や眉間と鼻部に付く筋肉よりも閉眼する際に使われる筋肉や口唇周囲の筋肉の方が発達するのが早い。つまり、表情筋は使い方によって、発達が異なっている。国によって、子どもたちのよく働く表情筋は同じ部位であるか検討する。また、Jack et al. (2009) の研究結果による、顔を見る時の東洋人と西洋人の違いを考慮し、表情の読み取り方から顔面筋を上下で分けて検討することで意味があるかもしれない。

従って、本研究では子どもたちのよく使われる表情筋を考慮し、使われた顔面のパーツにより、5つの項目のうち4項目を2パーツに分類した。「眉間に皺を寄せる」と「眉毛を上げる」項目は上のパーツであり、「口を動かす」と「微笑む」項目は下のパーツとした。

本研究の分析対象は以上の13項目であった。

Table 3-2 観察する項目内容とその略語

番号	略語	説明	カテゴリ	顔の筋肉使われた部位
1	SH	頭を掻く	動作	
2	PC	姿勢崩れ, 変わる	動作	
3	LC	時計を見る	動作	
4	LR	周りを見る	動作	
5	LE	実験者を見る	動作	
6	Tse	独り言	言語	
7	AP	実験者にパズルのやり方を言葉で聞く	言語	
8	Tso	実験者に話を掛ける	言語	
9	Fr	眉間に皺を寄せる	表情	上
10	RE	眉毛を上げる	表情	上
11	MM	口を動かす	表情	下
12	Sm	微笑む	表情	下
13	Si	ため息をつく	表情	

#### 3.3.2.4.2 コーディングの仕方

10 秒間ごとでコーディングした。10 秒間以内で項目の有無を記録し, 10 秒間以内で 1 回以上出現しても 1 回とした。すべて 1 分間当たりの平均回数として計算した。

#### 3.3.2.4.3 信頼性

データは日本人 1 人と筆者 1 人が記述したものであった。2 人が記述したものがどれだけ信頼性のあるものかを検討するために、Loewen & Philp (2006)の研究を参考にし、ランダムに 10% の子ども (n=6) のデータを選択し、カッパ係数を求めた。その結果、 $k = .806$  という高い値が確認された。

#### 3.3.2.5 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し子どもの保護者の同意を得、保育園の園長のサインにより、インフォームドコンセントを得た。

また、この実験と観察は聖心女子大学心理学科倫理委員会の承認のもとで行われた。なお、本研究で得られたデータは米国心理学会 (American Psychological Association: APA) の基準に従い、5 年間保持された後に破棄される。

#### 3.3.3 結果

一つ目のパズルは 45 名の子ども全員ができた。二つ目のパズルは子どもそれぞれの完成度であった。二つ目のパズルを完成したのは 0 名であった。また、50%以上完成させた 5 名の子どもは日本の子どもであった。三つ目のパズルも 45 名の子ども全員ができた。ゆえに日本と中国の子どものパズルを解く能力には差がなく、一つ目と三つ目のパズルは簡単で、二つ目は難しいと判断した。

##### 3.3.3.1 全体の行動の相違

Figure 3-2 は 3 つパズルにおいて、1 分間当たりの両国の男女別の出現した

13 項目の平均項目数を示している。パズルを完成した時間に個人差があるが、すべて 1 分間当たりとして計算した。横軸はパズルごとにおける国籍と性別、縦軸は 1 分間でみられた行動の平均項目数である。

国籍と性別を独立変数にして、各パズルの行動項目数を従属変数として、2 要因分散分析を行った。その結果、一つ目のパズルにおいて、国籍における主効果が有意であった ( $F(1, 41) = 9.81, p < .01, \eta^2 = .193$ )。性別による主効果は認められなかった (*n. s.*)。国籍と性別の交互作用も認められなかった (*n. s.*)。二つ目のパズルにおいても国籍の主効果が有意であった ( $F(1, 41) = 23.85, p < .001, \eta^2 = .368$ )。性別による主効果は認められなかった (*n. s.*)。国籍と性別の交互作用も認められなかった (*n. s.*)。また、三つ目のパズルにおいても、国籍の主効果が有意であった ( $F(1, 41) = 10.40, p < .01, \eta^2 = .202$ )。性別による主効果は認められなかった (*n. s.*)。性別による主効果は認められなかった (*n. s.*)。国籍と性別の交互作用も認められなかった (*n. s.*)。

以上のように、簡単なパズルと難しいパズルにおいて、いずれも日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが項目数が有意に多いことが示された。

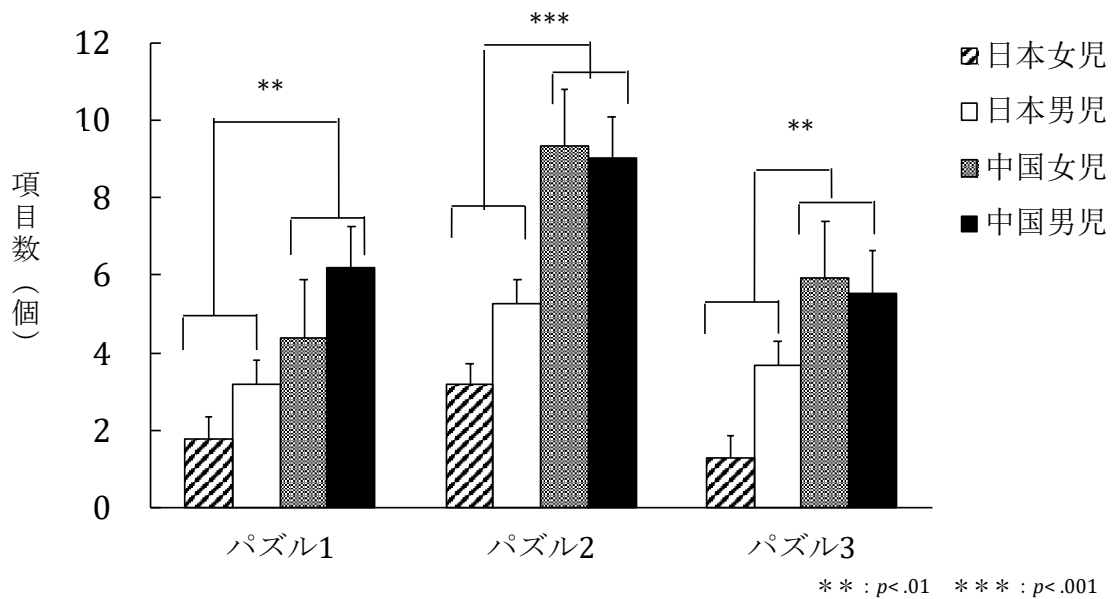


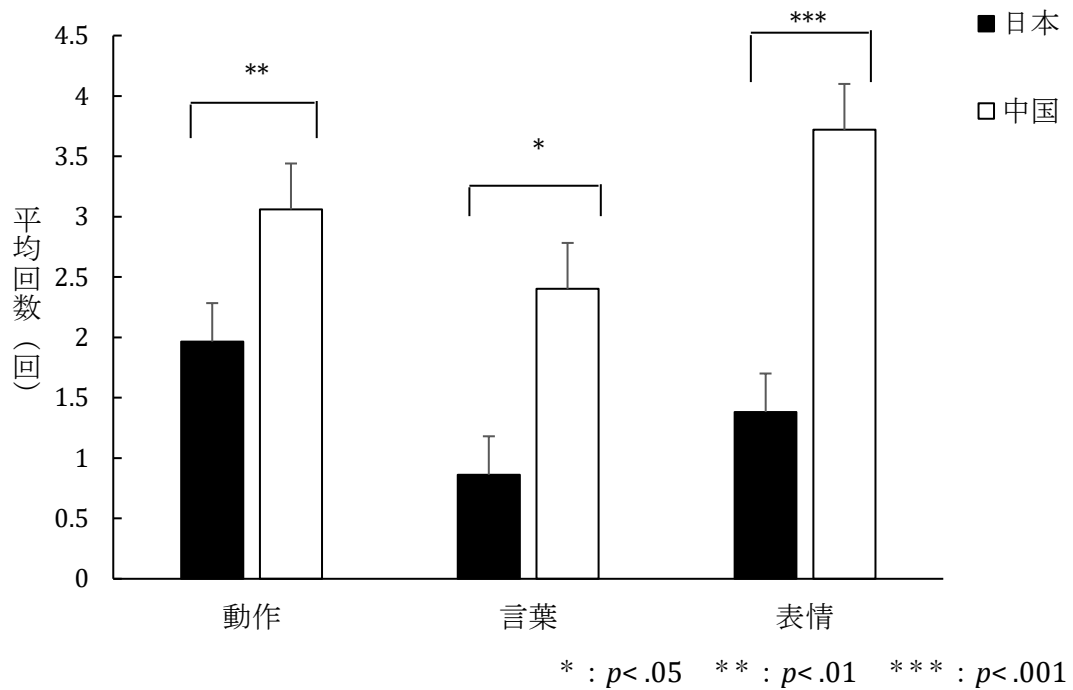
Figure 3-2 パズルごとの両国男女別 13 項目の平均項目数の比較  
(エラーバーは標準誤差)

### 3.3.3.2 二つ目のパズル

#### 3.3.3.2.1 カテゴリーの比較

完成できない課題に取り組む際の両国の子どもの行動の相違を検討するため、二つ目のパズルでみられた行動の相違を詳しく分析した。13 行動項目を「動作」、「言葉」と「表情」の 3 つにカテゴリー化し、合計した結果を Figure 3-3 に示した。横軸は国籍、縦軸は 1 分間あたりでみられた行動の平均回数である。日本と中国の子どもの 13 項目を「動作」、「言葉」と「表情」の 3 つカテゴリーに分け、国籍を独立変数にして、行動の回数を従属変数として、1 要因分散分析を行った。その結果、3 つのカテゴリーいずれも国籍の主効果が見られた（「動作」： $F(1, 41) = 7.39, p < .01, \eta^2 = .147$ ；「言葉」： $F(1, 41) = 6.72, p < .05, \eta^2 = .135$ ；「表情」： $F(1, 41) = 30.05, p < .001, \eta^2 = .411$ ）。

以上のように、カテゴリーでも、**「動作」**、**「言葉」**と**「表情」**3つのカテゴリーいずれも日本の子どもと比べて、中国の子どもの行動回数が有意に多いことが分かった。



**Figure 3-3** 二つ目のパズルにおいて、3つのカテゴリーの平均回数の比較  
(エラーバーは標準誤差)

### 3.3.3.2.2 各項目の比較

そこでさらに、二つ目のパズルの13項目のうちどの項目に国籍の差があるかを検討した。国籍別の各項目の出現した平均回数はFigure 3-4のようになった。横軸は項目、縦軸は1分間あたりでみられた各行動の平均回数である。

国籍を独立変数、行動項目の回数を従属変数として、1要因分散分析を行った結果は、「時計を見る」、「周りを見る」、「実験者を見る」、「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」、「実験者に話を掛ける」、「眉間に皺を寄せる」、

「眉毛を上げる」, 「口を動かす」, 「ため息をつく」合計 9 個項目に国籍の主効果が見られた (「時計を見る (LC)」  $F(1, 41) = 6.65, p < .05, \eta^2 = .140$ ; 「周りを見る (LR)」  $F(1, 41) = 13.53, p = .001, \eta^2 = .248$ ) ; 「実験者を見る (LE)」  $F(1, 41) = 9.07, p < .01, \eta^2 = .181$  ; 「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く (AP)」  $F(1, 41) = 4.14, p < .05, \eta^2 = .092$  ; 「実験者に話を掛ける (Tso)」  $F(1, 41) = 7.93, p < .01, \eta^2 = .162$  ; 「眉間に皺を寄せる (Fr)」  $F(1, 41) = 4.26, p < .05, \eta^2 = .094$  ; 「眉毛を上げる (RE)」  $F(1, 41) = 10.39, p < .01, \eta^2 = .202$  ; 「口を動かす (MM)」  $F(1, 41) = 13.11, p < .001, \eta^2 = .242$  ; 「ため息をつく (Si)」  $F(1, 41) = 14.22, p < .001, \eta^2 = .257$  )。また, 「独り言 (Tse)」という項目では国籍の違いでは有意傾向がみられた ( $F(1, 41) = 3.23, p < .1, \eta^2 = .073$ ) 。

以上のように, 国籍による差が認められた項目と認められなかった項目があることが分かった。



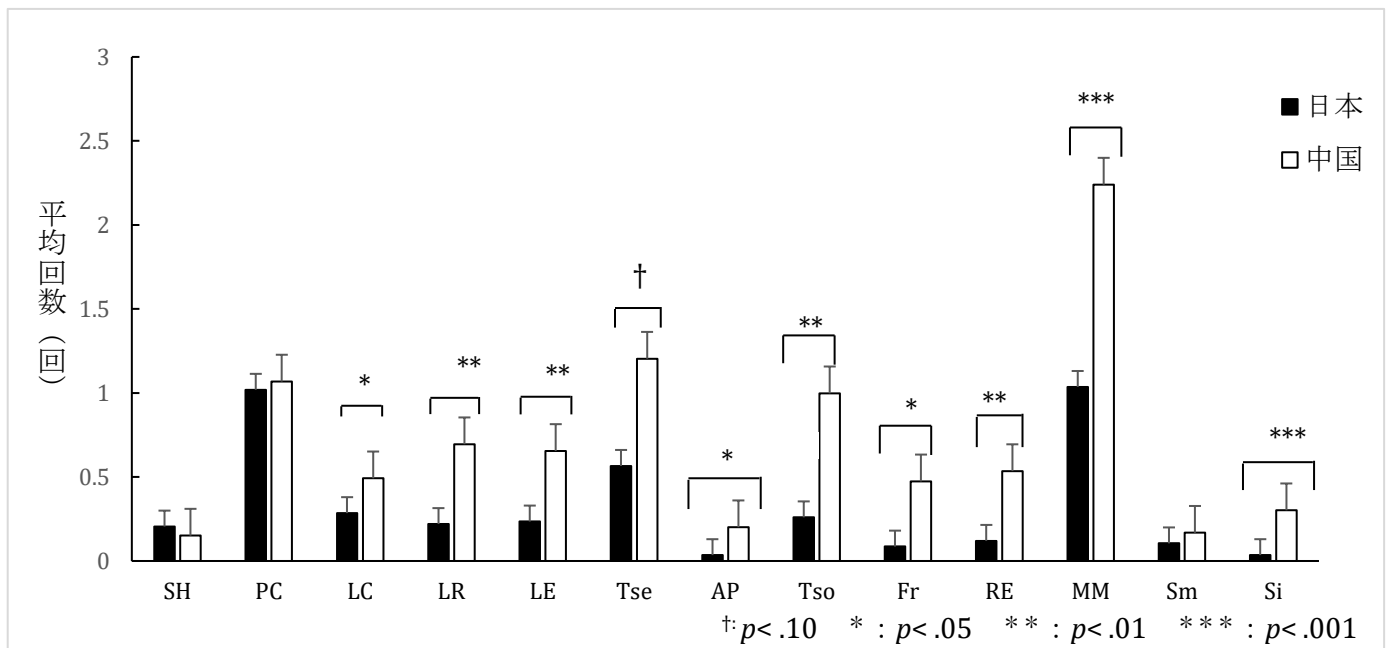


Figure 3-4 二つ目のパズルにおいて、13項目の平均回数の比較  
(エラーバーは標準誤差)

### 3.3.3.2.3 上下2パーツで表情を詳しく分析した結果

次に、二つ目のパズルにおいて、表情の上パーツと下パーツの差を検討する。

Figure 3-5はその結果を表している。横軸はパーツ、縦軸は1分間あたりでみられた行動の平均回数である。

まず、両パーツにおける国籍と性別の差についてみる。上のパーツにおいて、国籍と性別を独立変数、動きの出現した回数を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、国籍の主効果が見られた ( $F(1, 41) = 11.87, p < .001, \eta^2 = .224$ )。性別の主効果は見られなかった (*n.s.*)。国籍と性別の交互作用もみられなかった (*n.s.*)。また、下のパーツにおいても、同じく国籍と性別を独立変数、動きの出現した回数を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、国籍の主効果が見られた ( $F(1, 41) = 14.48, p < .001, \eta^2 = .261$ )。

また、性別の主効果において、有意差が見られた ( $F(1, 41)= 4.08, p < .05, \eta^2 = .090$ )。下のパーツにおいても国籍と性別の交互作用はみられなかった (*n. s.*)。

このように、その結果と平均値を見ると、顔の上のパーツと下のパーツにおいて、いずれも中国の子どものほうが多く顔を動かすことが多かった。

日本の子どもにおいて、上のパーツを動かす回数の平均は 0.21 回 ( $SD=0.38$ ) と下のパーツの動かす回数の平均は 1.14 回 ( $SD=0.98$ ) であった。1 要因分散分析を行った結果、パーツによる主効果が見られた ( $F(1, 19)=19.12, p < .001, \eta^2 = .502$ )。また、中国の子どもにおいて上のパーツを動かす回数の平均は 1.02 回 ( $SD=0.98$ ) と下のパーツの動かす回数の平均は 2.43 回 ( $SD=1.27$ ) であった。1 要因分散分析で、パーツによる主効果が見られた ( $F(1, 24)=17.60, p < .001, \eta^2 = .423$ )。

日本と中国両国とも子どもは顔の上のパーツ動かすことよりも下のパーツを動かすことが多いと解釈することができる。

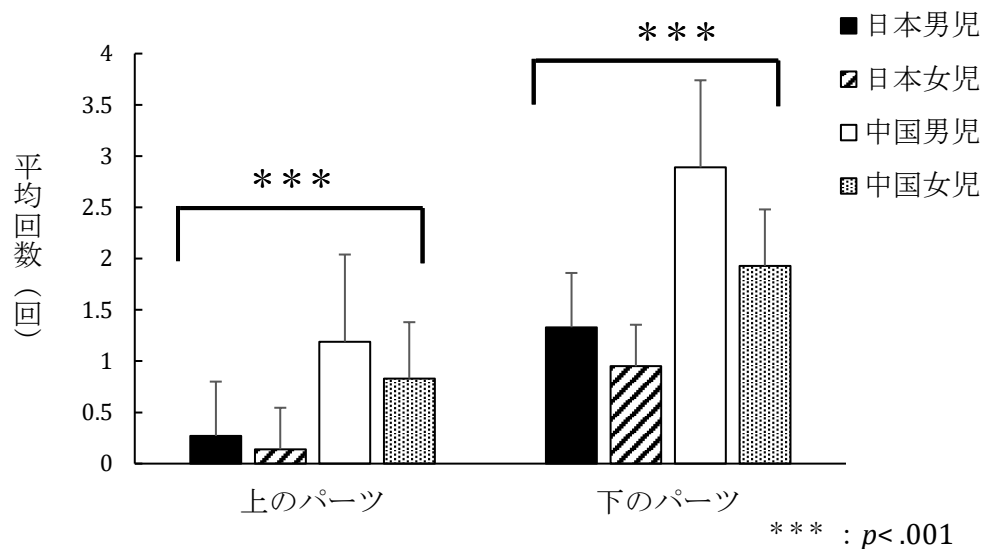


Figure 3-5 表情の上下パーツの比較  
(エラーバーは標準誤差)

### 3.3.3.3 3つのパズルを始めた時の行動の比較

これまでは各パズルにおいて、行動項目の生じる状況について検討したが、ここでは、パズルが変わった時、子どもの反応の変化があるかどうかをみる。例えば、二つ目のパズルを見た時、難しいと認識するかどうか、難しいと認知した場合行動があるかどうか、また三つ目のパズルを見た時、簡単だと認識するかどうかなどを両国の子どもにおいて、検討した。3つパズルを始めた10秒間に行動があった(13項目の1つでもあった)子どもの数を Figure 3-6 に示した。横軸はパズル、縦軸はみられた行動の人数である。

まず、一つ目のパズルにおいて、最初の10秒の間、行動(13項目の1つでもあった)がみられた日本の子どもは7名、行動がみられた中国の子どもは14名であった。日中両国の子どもの差は有意ではないことが分かった(*n. s.*)。そし

て、二つ目のパズルにおいて、行動が見られた日本の子どもは7名、行動が見られた中国の子どもは20名であった。日中両国の子どもの差は有意であった ( $\chi^2(1) = 9.38, p < .01$ )。三つ目のパズルにおいて、行動が見られた日本の子どもは6名、行動が見られた中国の子どもは19名であった。同様に、日中両国の子どもの差は有意であることが分かった ( $\chi^2(1) = 9.52, p < .01$ )。

また、性差を検討した。その結果、一つ目パズルには性差が見られ、男児の方に行動が多かった ( $\chi^2(1) = 3.81, p < .05$ )。二つ目のパズルと三つ目のパズルには性差が見られなかった (*n. s.*)。

以上のように、二つ目のパズルと三つ目のパズルの最初10秒間の行動の有無では「中国の子ども」の人数が「日本の子ども」に比べ有意に多かった。

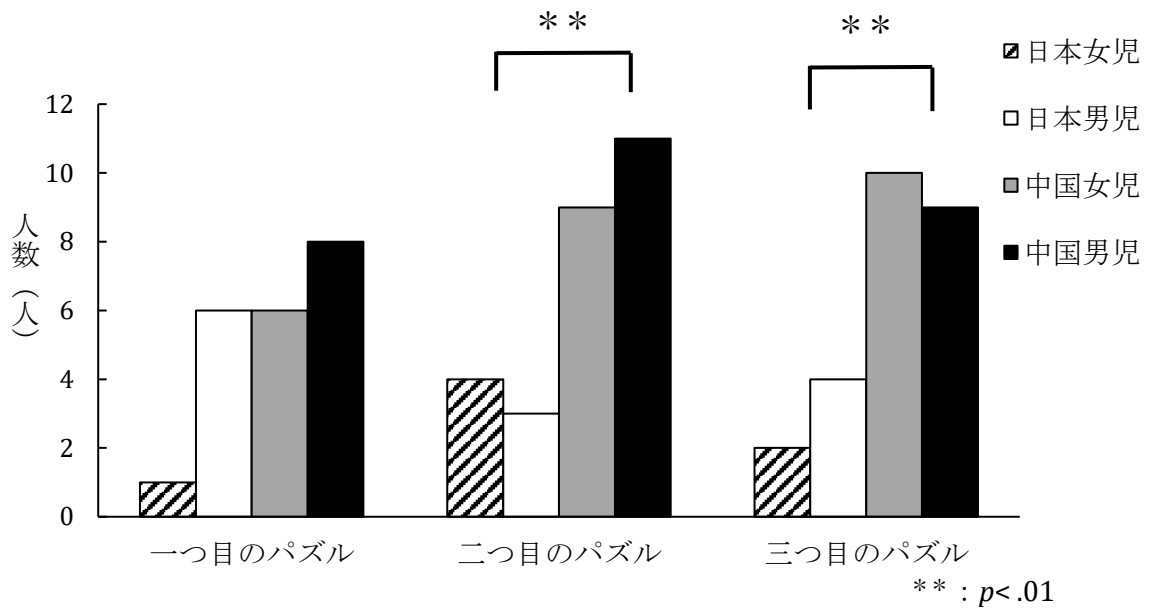


Figure 3-6 3つパズルの最初10秒間行動あり状況の比較

### 3.3.3.4 パズルが終わった時の行動の比較

3.3.3.3 ではパズルに取り組む時、両国の子どもが開始した時の行動反応の相

違を検討したが、明らかに「成功」した場合には相違があるかどうかを検討するため、45名全員完成した一つ目のパズルと三つ目のパズルの終わった時の行動を検討する。

そこで、終わる際の行動有無状況を合計した結果を Figure 3-7 に示した。横軸はパズル、縦軸は行動がみられた子どもの人数である。まず、一つ目のパズルにおいて、行動が見られた日本の子どもは17名、行動が見られた中国の子どもは21名であった。フィッシャーの直接法 (Fisher's exact test) で検討したところ、日中両国の子どもの差はないことが分かった (*n. s.*)。そして、三つ目のパズルにおいて、日本の子どもに反応が見られたのは19名、中国の子どもに反応が見られたのは24名であった。同じく、フィッシャーの直接法で比較したところ、日中両国の子どもの差は有意ではないことが分かった (*n. s.*)。また、フィッシャーの直接法を行い、性差を検討したが、一つ目のパズルと三つ目のパズル、いずれも有意差が見られなかった (*n. s.*)。

以上の結果のように、一つ目のパズルと三つ目のパズルの完成した際の反応は日本と中国の子どもの差がないことが分かった。

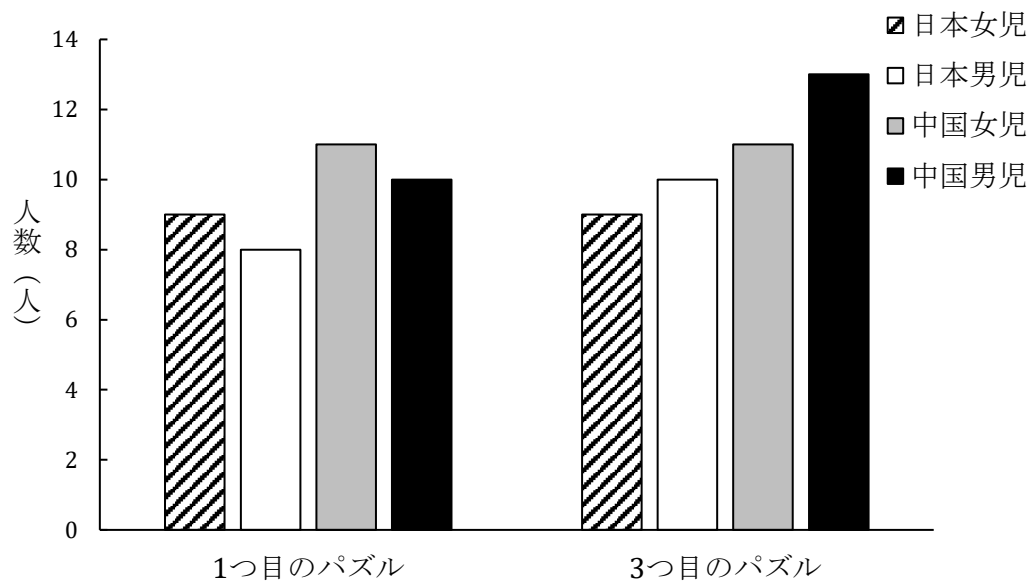


Figure 3-7 一つ目のパズルと三つ目のパズルの終わりの比較

### 3.3.3.5 3つのパズルの難易度についての回答

3つのパズルに取り組んだ後、パズルの難易度について、子どもに“どうだった？簡単だった？難しかった？”と聞いた。

簡単である一つ目のパズルについて、口頭またはうなずきの形で「簡単」「簡単」と回答した日本の子どもは6名（頷きで回答した3名を含む）、中国の子どもは23名（頷きで回答した1名，“不难”で回答した1名を含む）であった。また、難しい二つ目のパズルについて，“難しい”“难”で回答したのは日本の子1名（頷いた），中国の子どもは22名であった（“不简单”で回答した2名を含む）。三つ目のパズルについて，“簡単”と口頭またはうなずくの形で回答した日本の子どもは8名（頷いた3名，「難しい」で頭を横に振る1名を含む），中国の子どもは24名であった（“不难”で回答した1名，“这个还好（これは大丈夫）”で回答した1名を含む）。

また、日本の子どもしかみられなかった“楽しかった”という回答があった（一つ目のパズル：9名、二つ目のパズル：16名、三つ目のパズル：12名）。そのほか、一つ目のパズルについて“難しい”で頷いた日本の子どもは2名，“難しい”と“簡単”両方回答し答えが矛盾した日本の子どもは3名、中国の子どもが1名，“難しい”と答えた中国の子どもは1名であった。二つ目のパズルについて、矛盾した答えを言った日本の子どもは1名，“簡単”と答えた中国の子どもが1名、回答なしは日本の子どもが2名と中国の子どもが2名であった。三つ目のパズルについて，“難しい”と答えた中国の子どもは1名であった。

この結果から、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうがパズルの難易度について明確に簡単か難しいかを回答する子どもが多かったことが分かる。

### 3.3.3.6 発話の内容

二つ目のパズルにおいて、「実験者に話掛ける」（ES-D）という言葉の項目で見られた発話の内容を分類し、具体的な例と各分類の言葉を発話した子どもの人数を Table 3-3 と Table 3-4 でまとめている。

日本の子どもにみられた発話の内容は4種類（「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」・「時計の話をする」）に分けた。中国の子どもにみられた発話の内容を分類すると、「困難だと認め、言う」・「自分の意思を表す」・「できないことを言う」・「パズルの内容を言う」・「雑談をする」・「自分の成果をみせる」・「やり方の解説」・「他人のことを聞く」・「簡単だと表現する」・「パズル内容からの連想」10種類であった。

日本の子どもに最もみられたのは「パズルの内容を言う」、中国の子どもに最もみられたのは「困難だと認め、言う」であった（Table 3-3, Table 3-4）。

以上のように、二つ目のパズルに取り組む時に、日本と中国の子どもに共通にみられた発話は「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」という3種類内容であった。日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが発話の内容の種類も数も多くみられた。

**Table 3-3** 日本の子どもの ES-D の発話

分類	例	人数
パズルの内容を言う	キリンさん これはくじらの尾	5人
困難だと認め、言う	これ難しい	4人
できないことを言う	分からない	1人
時計の話をする	ウサギだ	1人

**Table 3-4** 中国の子どもの ES-D の発話

分類	例	人数
困難だと認め、言う	怎么这么难啊? (なんでこれはこんなに難しいの?) 这拼图, 太多了 (このパズルは多すぎ) 这个拼图太难了 (このパズルは難しいすぎ)	9人

続く



Table 3-4 の続き (1)

<p>自分の意思を表す</p>	<p>我不想拼了。 (私もうやりたくない)</p> <p>我觉得这拼图好难, 我想换一个拼图了。 (私このパズルは難しいと思う, 別のにかえたい。)</p> <p>再玩一次, 我自己选。 (もう一回やる。今度自分で選ぶ)</p> <p>没意思。 (つまらない)</p> <p>好累啊 (疲れた)</p>	<p>7 人</p>
<p>できないことを言う</p>	<p>拼不来。 (できない)</p> <p>我就是拼不来啊 (私はどうしてもできない)</p> <p>老师, 我输了。 (先生, 私負けた。)</p> <p>这个我不知道。 (これ分からない)</p>	<p>6 人</p>
<p>パズルの内容を言う</p>	<p>大鲨鱼。 (サメ)</p>	<p>4 人</p>
<p>雑談をする</p>	<p>我在家里拼过, 在外边就不是了。 (私家でやったことがあるけど, 外ではない。)</p> <p>我觉得, 00 班很无聊。 (私はクラスつまらないと思う。)</p> <p>我家里有很多书。 (私の家に本がたくさんある。)</p> <p>在家, 我都是和大孩子玩 (家では, 私はいつも年上の子ども達と遊ぶ)</p>	<p>4 人</p>

続く

Table 3-4 の続き (2)

	<p>我奶奶很笨的...人家小朋友的奶奶很聪明的。</p> <p>(私のお婆ちゃんは頭悪い...他の子どものお婆ちゃんの頭がいい。)</p>	
自分の成果をみせる	<p>我自己拼好了，你看。 (私はできた，見て)</p>	2人
やり方の解説	<p>拼奶奶说要先拼外面...</p> <p>(私のお婆ちゃんはパズルを外からやると言っていた)</p> <p>我拼鸡 (私は鶏からやる)</p>	2人
他人のことを聞く	<p>为什么你不叫 XX 拼。</p> <p>(なんであなたは XX ちゃんにやらせないの?)</p> <p>想让我拼吗? (私にやってほしいの?)</p> <p>老师，这个拼图对我来说很简单哟，对其它小朋友来说很简单的吗?</p> <p>(先生，このパズル私にとっては簡単だよ。他の子ども達にとっても簡単なの?)</p> <p>他们想让我这个小妹妹玩?</p> <p>(彼らが小さい私にやらせたいの?)</p>	2人
簡単だと表現する	<p>老师，这个我很快就拼完的。</p> <p>(先生，これ私すぐできる。)</p> <p>这个不难</p> <p>(これは難しくない。)</p>	2人
パズルの内容からの 連想	<p>老虎和狮子家族是好朋友</p> <p>(虎家族とライオンさん家族はお友達。)</p>	1人

### 3.3.4 考察

文化心理学の研究は多い (e.g. Brunner, 1990; Cole & Dennis, 1998; Geertz, 1973; Jahoda, 1992; Markus & Kitayama, 1991; Miller, 1994a, 1994b; Miller & Bersoff, 1994; Shweder, 1991)。

これらの先行研究では西洋と東洋の国の文化の影響力について比較する時、東アジアにある国を一つのグループにし、同じ東アジアの中での国の文化的な影響の違いを検討していない (e.g. Brazelton et al., 1969; Caudill & Weinstein, 1969; Freedman, 1976; Freedman & Freedman, 1969; Ng, Pomerantz, & Lam, 2007; Ekman & Friesen, 1971; Shimoda et al., 1978, Lewis et al., 2010)。日本と中国は、歴史、言語、政治模式、習慣など様々な面で異なっている、それは北山 (1994) が定義した文化の概念と一致している。同じ東アジアの中でも国により、人のコミュニケーションの仕方、感情表出の違いがあると考えられる。同じ東アジアにある国の違いがあれば、今までひとくくりされてきたことへの疑問を呈示することができる。また、その違いを知ることは、お互いへの理解にも繋がると考えられる。ところが、幼児を対象にした研究はほとんどない。

そこで、本実験では、45名3歳の子どもの協力を得て、同じ東アジアにある日本と中国、両国の子どもが同じパズル課題を面する際の行動の相違を検討した。以前の研究で使用した項目に基き (Fu, 2015)、新しい項目も取り入れ、両国の子どもの行動を比較した。その結果、(1)課題に取り組む時、中国の子どもは日本の子どもより行動項目数が多かった、(2)課題に取り組む時間軸により、行動が出やすい時間に違いがあった(3)日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが顔面上のパーツと下のパーツの動きが多かった、(4)両国の子どもは課題の難易度の変化に関する行動が違った (パズルを取り組み始める時の、両国の子

どもたちの行動の違いによる) , (5)課題が終った後両国の子どもの行動に違いがなかった(6)両国の子どもの課題の難易度についての回答の違いがみられた, (7)中国の子どものほうが「自己主張」的な発話が多かった, ことが示唆された。以上の結果にもとづいて論じる。

#### 3.3.4.1 全体の行動の違いについて

まず, パズルに取り組む時, パズルの難易度と関わらず, 中国の子どもは日本の子どもより行動項目が多いことが分かった (Figure 3-2)。日本の子どもより中国の子どものほうが問題場面に対して, 行動を多く表出すると推測できる。

#### 3.3.4.2 難しいパズルにおいて

また, 難しいパズル (二つ目のパズル) において, カテゴリーで両国の子どもの行動の違いをみると, 「動作」「言葉」「表情」3つカテゴリーいずれも日本と中国の子どもの行動回数の違いがみられた (Figure 3-3)。全体からみると, 難しい課題に取り組むとき, 中国の子どものほうが問題場面に対して, 動作・言葉・表情を多く表出した。

そして, 詳しく各項目で相違をみてみると (Figure 3-4), 「時計を見る」, 「周りを見る」, 「実験者を見る」, 「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」, 「実験者に話掛ける」, 「眉間に皺を寄せる」, 「眉毛を上げる」, 「口を動かす」, 「ため息をつく」と「独り言」合計 10 項目では中国の子どものほうが多くみられた。また, 「頭を搔く」「姿勢崩れ, 変わる」「微笑む」項目には両国の子どもの差がないことが分かった。その結果から, 両国の子どもが難しい課題に取り組む際に, 必ずしも全ての行動において差があるとは言えないことが分

かった。

生物学的理論からみても、文化的・社会的プロセスは感情の表出を制御するための規範「ディスプレイ・ルール」に影響を与えている (Darwin, 1965; Ekman, 1984; Izard, 1993; Tomkins, 1962)。従って、難しいことに取り組み、ストレスと直面する時、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが心の状態を動作、言葉、表情などを通し、行動に移す傾向があると推測できる。動作、言葉、表情などの形で情動を表現することは文化に影響されている可能性がある。その結果は Kitayama & Masuda (1995) と Kitayama & Markus (1994) の「感情は生理的、主観的、行動的要素を持ち、かつ社会・文化に構成された典型的行動様式である」という結論と同じである。

#### 3.3.4.2.1 独り言

「独り言」は人が自分に語るものであり、自信と不安を調整し、行動に影響と与える機能がある (e.g. Meichenbaum, 1977; Ellis, 1976; Hatzigeorgiadis, Zourbanos, Mpoumpaki & Theodorakis, 2009; Zinsser, Bunker & Williams, 2006)。二つ目のパズルにおいて、両国の子どもにみられる「独り言 (Tse)」行動の結果から (Figure 3-4), 日本と中国の子どもとも難しい課題に取り組む時、「独り言」行動の形で感じた不安を調整しようとすると考えられる。中国の子どもの子どものほうが「不安」を感じやすいか「不安を調整する」行動が発生しやすいのかもしれない。

#### 3.3.4.2.2 自ら助けを求める

White & Watts (1973) は、3歳児が自分で問題解決できない場合、大人を解

決手段として使うと述べた。本研究で解決できない時実験者にパズルのやり方を尋ねること（項目「AP」）が日本の子どもよりも中国の子どもに多くみられた結果は、Fu (2015)の結果と一致している。Figure 3-4で示している行動の結果により、日本の子どもと比べると、中国の子どものほうが言葉で要求しやすいことが分かる。

また、日本の子どもはできなくても、自分で考え、解決しようとするが、それに対して、中国の子どもは初対面の人でも、解決方法を聞くと考えられる。それは教育との緊密な関連があると考えられるが、国の歴史文化及び社会の経済発展状況とも関係しているだろう。中国にも「顔に出ないことがよいこと」という道徳観があるが、清代の末の頃、新文化運動で西洋文化が中国に入り、思ったことを勇気を持って、言い出すことを推奨された。それから、中国人は自分の考えをはっきりいえるようになってきた。また、現在、中国の経済が発展し、はっきり自分の意見を述べる力、早期から言語の発達が求められていることも関係しているかもしれない（吉田，2011）。

#### 3.3.4.3 表情について

Figure 3-5により、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが表情の出現が多いことが分かった。この点は大坊・上出・村澤・趙・毛・高橋（2007）の、日本人は表情表出が乏しいという研究結果と一致している。

また、国を問わず、3歳の子どもの「難しい課題」に取り組む時、「額・眉・鼻根」よりも「口・唇・顎」の部分が多く動かしていることが分かった。それは子どもの顔面の筋肉の発達と関係している可能性が考えられる。言い換えると、3歳児でも生活による、食事、泣きなど行動で「口・唇・顎」の顔面筋のほうを

多く使うため、情動を現す時も他の部面よりも多く「口・唇・顎」の顔面筋を動かす可能性がある」と推測できる。

#### 3.3.4.4 易-難-易の順番

容易な課題-困難な課題-容易な課題の順番で、最初の 10 秒間の行動有無の比較を通し、両国の子どもの刺激に対する敏感度から行動の違いを検討した。最初の一つの目のパズルに対して、両国の子どもの行動の違いがみられなかったが、続きの難しいパズルとその後の簡単のパズルに対して差がみられた (Figure 3-6)。日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが変化に対して、行動を表出しやすく、感情の変化を起しやすいためと推測される。

#### 3.3.4.5 課題が終わった時の行動

3.3.4.4 では、両国の子どもの行動の違いについて述べたが、ここでは、両国の子どもの類似したところについて検討する。Lewis et al. (2010) の研究では成功した場合と失敗した場合ともアメリカの子どもと日本の子どもの反応の差がみられた。Figure 3-7 から同じ東アジアである日本と中国の子どもにおいて、課題を完成した場合、日本と中国の 3 歳の子どもには行動反応の差がないことが分かった。Lewis et al. は、成功した場合と失敗した場合で見られた行動と情動表出は自己評価を意味し、またその自己評価の表現は 3 歳から見られると述べている (Lewis, Alessandri & Sullivan, 1992; Lewis & Ramsay, 2002; Lewis & Sullivan, 2006; Stipek, Recchia, McClintic & Lewis, 1992)。課題に取り組む時の行動に違いがあっても、成功した場合において自己評価する時の行為は似ていると言えるのではないかと推測される。すなわち、日本と中国の文化、美徳への価値観の違いが行動の違いを生み出している可能性がある。

値観に違いがあっても、子どもは「できた」と感じ、嬉しい気持ちの場合、行動は似ていると言えるだろう。

成功した場合では、両国の子どもに行動の差がみられなかったが、難しい場合、両国の子どもの行動の差がみられた。このことから、両国の子どもは場合によって、行動に相違があることが考えられる。

#### 3.3.4.6 課題の難易度についての回答

結果 3.3.3.5 により、日本の子どもと比べ、中国の子どものほうがパズルの難易度についてはっきりとした答えが多かったといえる。特に、2つ目のパズルに注目すると、中国の子どもには「難しい」という回答が多く、日本の子どもでは「楽しかった」という答えは1つ目のパズルと三つ目のパズルよりも多かった。その結果から、2つの可能性が考えられる。1つは、言葉の使用に関して、中国の子どもは考えていることをそのまま出すという直線型で、日本の子どもが考えていることを曖昧に、ほかの言い方に換えて出すという迂回型であることである。この点は先行研究の結果と一致している（久米・徳井・徐，2000）。

もう1つは、日本の子は課題に取り組むこと自体に夢中になり、パズルのできに関して、関心が低い可能性がある。久米・徳井・徐（2000）の「日本人のコミュニケーションスタイルの特徴は課題を達成することよりも楽しむことを重視する傾向である」という記述とも一致している。Kitayama & Markus（1994）の先行研究で、日本は相互協調的文化であり、相互協調にするタスクでの成功が「掛け値なしの」成功としているとしていることとも関連するかもしれない。

村瀬（1996）は、「素直」は日本人の心性の特徴であると考えている。また、佐藤（2001）は日本人の「素直」は欧米の「明白」と違っており、欧米では、ど



んな状況でも自分の考えを明白に言葉で表現することが大事だと述べている。本研究で、子どもがパズルの難易度についての回答の結果からみると、中国の子どもと対比すると、日本の子どもは「明白」ではないことが検証できた。

#### 3.3.4.7 発話の内容

3.3.4.2.1のような言語と思考の関係、文化の影響力について、数多くの研究が行われてきた（Gagne & Smith, 1962 など）。

また、Table 3-3 と Table 3-4 によれば、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが発話の種類が豊かで、自己主張の発話が多いことが分かった。中国の子どもにみられた自己主張の発話は鈴木（2010）の分類と一致している。鈴木（2010）の分類では、大きく「要求・拒否」と「抗議」に分けられている。本実験でみられた子どもの「パズルを難しいと言い、他のパズルにしたい」という発話は「要求・拒否」に当てはまる。また、中国の子ども「雑談をする」のもパズル課題に対する「拒否」行為だと考えられる。自己主張をするか否かではなく、その主張の仕方に違いがあり、日本人の場合は個人差がよくみられると張（2009）は述べている。また、荒木（2011）は、日本の教育では「空気をよむ」という文化を大事にし、言葉がなくても、自分の感受性によって動くことは日本人の特徴だと述べている。本研究の結果でも、日本の子どもと比べて、中国の子どものほうに多く発言がみられた。

本研究でみられた日本と中国の子どものコミュニケーションの仕方の違いは先行研究と一致している部分がある。大人の場合、自発的に、自分が場に合い、相応しいと思っている方法選び、または今までの対応のルーティンと癖で対応していることが多い。それに対して、子どもには沢山の体験をし、その過去の経

験から学ぶ必要があると考えられる。このように経験を積むことにより物事、場面への対処がより上手になっていくのだろう。

#### 3.3.4.8 性差について

本研究においてほぼ性差がみられなかった。この点について、原因が2つ考えられる。1つは、サンプル数の少なさである。もう1点は、パズルを完成する課題では幼児の男女差がみられない可能性がある。

### 3.4 課題と展望

本研究においては、パズル課題を行うことで、日本の子どもと中国の子どもの行動の相違を検討することができた。

今回は、男女の性差がみられなかったが、より多くサンプルをとる必要があるかもしれない。

また、「文化研究には進化という時間を超えて継続する生活様式の解明と、出生から生涯にわたる仲間関係のありかたを個体発達の時間軸にそって解明することが必要である」と南（2007）が指摘している。すなわち、「文化」の特性の一つは変化であり、時間が経つとともに、その「文化」という背景の特徴を検討し、対比することが必要であると考えられる。よって、縦断的研究で検証することが、子どもの行動と背景となる「文化」の意味をさらに吟味することになるのではないだろうか。

（研究1の一部は *Journal of Human Environmental Studies*, 2018, 16(1), 51-56, に記載された。）

## 第4章 パズル課題における韓国の子どもの行動「研究2」

本研究は、今後1年以内に出版される可能性があるため、図表を削除し、全文に代えて要約を記す。

### 4.1 要約

本研究では韓国京畿道市内にある保育園の4歳の典型発達児14名(男児10名, 女児4名), と同保育園の3歳の典型発達児11名(男児3名, 女児8名)に研究1と同じ3つ(簡単-困難-簡単)のパズル課題に取り組んでもらい, この過程をビデオで録画し, 分析した。観察した16の行動項目は動作, 言葉, 表情と大きく3つのカテゴリーに分けられる。課題に取り組む際の子どもの行動を分析した。

課題に取り組む時, 3歳児より, 4歳児のほうが(1)行動回数が多かった(2)顔の上パーツと下パーツの動きが多かった(3)「自己主張」的な発話が多かった, という結果が得られた。また, (4)同じ難易度のパズルに取り組む時, 2回目の方が3歳児と4歳児とも完成する時間が短くなった(5)課題の難易度の変化に関しては, 3歳児と4歳児には明らかな差がなかった(6)課題が終わった後, 4歳児に多く行動がみられた(7)課題の難易度について4歳の子どもたちの方がはっきりと答えた人が多かった。

本研究で得られた重要な結果として, 同じ課題でも, 3, 4歳児の行動の違いを検討することができた。また, Fu (2018)と比較すると, 同じ3歳児でも日本と中国の子どもたちの結果と違いがあることが明らかであった。

### 4.2 目的

第1章でも述べたように、アジアというくくりで文化を扱うことに問題があると考えられる。柏木・北山・東(1997)の『文化心理学-理論と実証』という、日本における文化心理学の集大成の中にもアジアの国の違いについては取り上げられていない。東アジアの国は一つのグループとしてみられやすく、特に日本、中国、韓国などは集団主義的で、他者に強い関心を持つことが共通点であるとして (e. g., Lee, 2002; Lee & Rogan, 1991; Oetzel & Ting-Toomey, 2003; Ting-Toomey & Kurogi, 1998) , 一つのグループでまとめられがちである。

Maruyama, Ujie, Takai, Takahama, Sakagami, Shibayama, Fukumoto, Ninomiya, Ah & Feng (2015)は日本、中国、韓国の子どもが3歳の時点ですでに、コンフリクト・マネジメント戦略(conflict management strategies)が異なっており、中国の子どもは親密関係を利用する傾向、日本の子どもは妥協することを優先する傾向、韓国の子どもは支配することでコンフリクトを解決する傾向があると報告した。Fu (2018)は、日本と中国の子どもが課題解決の時、どのような行動が違っているか検討した。日本の子どもと比べて、中国の子どものほうが課題ができない時、たくさんの発話をする傾向があるが分かった。

上述のような知見を踏まえると、同じ東アジアの中でも、国によって、人の行動に大きい違いがあり、それはいわゆる文化の影響ではないかと考えられる。研究1では日本と中国の子どもの違いを検討したが、本研究では、韓国の子どもの行動を確認することを目的とする。また、文化、生活している国という環境は3、4歳の子どもにどのように影響を与えているのかも検討する。

## 4.3 方法

### 4.3.1 実験参加者

韓国のある保育園の4歳の典型発達児15名、と同保育園の3歳の典型発達児11名が実験参加者であった。途中やむをえない理由で実験を中止してしまった1名の子どものデータを除き、有効データは4歳児14名（男児10名、女児4名、 $M=4$ 歳6ヶ月、 $SD=.19$ ）、と3歳児11名（男児3名、女児8名、 $M=3$ 歳3ヶ月、 $SD=.22$ ）となった。

実験参加児全員は実験実施者と初対面であった。4歳児の実験実施者はネイティブの韓国人（20代、男性）で、3歳児の実験者は筆者自身であった。

#### 4.3.2 装置

紙製の15ピースのパズルと48ピースのパズルと14ピースのパズルを使用した。3つのパズルいずれもパズルボードが付いていた。3つとも第3章の研究1で用いたパズルと同じものであった。Fu (2018)の研究結果に基づき、15ピースのパズルと14ピースパズルを簡単なパズルと定義し、48ピースパズルを難しいパズルと定義した。

22.8cm x 22.8cmの大きさの時計で時間制限を説明した。

録画装置はデジタルカメラ(HDR-PJ790, SONY製)と三脚(Velbon, cs200)であった。

#### 4.3.3 手続き

##### 4.3.3.1 4歳児

実験を実施した場所は独立した部屋であった。同じ部屋にいるのは子どもと実験者1名と筆者であった。実験参加者が部屋に入る前に実験者が録画装置を設定し、スイッチをオンにした。実験者は子どもの右側または左側に座り、子ど

もにこれからやってもらい 15 ピースのパズルを見せ、実験者が子どもに“今日はパズルをやってもらいます”と説明した。実験者が発した“どうぞ”という合図で実験を始めた。

15 ピースのパズルができた後、“よくできたので、もう一つやってください”と 48 ピースのパズルを見せた。また、時計を使い、“長い針が 12 から 3 まで行ったら、それでパズル終了。”と子どもに 15 分の時間制限を説明した。

実験の予定制限時間は 15 分だが、子どもに負担をかけすぎないように、子どもから“もうやらない”のようなパズルに対してネガティブな言葉が出たら、実験を終了することにした。

48 ピースのパズルが終わった後、14 ピースのパズルをやってもらった。

すべてのパズルが終わった後、子どもにやったパズルは難しかったか簡単だったかと聞いた。実験中使われた教示は事前に統一し、韓国語で行った。

#### 4.3.3.2 3 歳児

実験の手順は 4 歳児と同じだが、筆者が 3 歳児の実験者になり、実験を行った部屋にいたのは実験者と参加者のみであった。

3 歳と 4 歳児とも実験者には初対面であった。

#### 4.3.4 分析方法

##### 4.3.4.1 カテゴリーの作成

Fu (2015, 2018)の研究で使用された項目に基き、また、予備実験の結果も考慮して、新しい項目も取り入れ、観察する行動のリストを作った。

子どもの行動は、大きく動作、言葉、表情 3 つカテゴリーに分けた。各カテゴ

リーの項目内容とそれらの定義は以下の通りであった。

動作項目は「頭を搔く」、「姿勢変わる」、「周りを見る」、「実験者を見る」、「顔を触る」、「頬杖」、「机を叩く」という7項目であった。「頭を搔く」は手で頭を搔く、「姿勢変わる」という項目には姿勢の崩れ、立つ、斜めになるなど座った状態から明らかな状態変換が含まれていた。「実験者を見る」は実験者を見る、「顔を触る」は手で顔を触る、「頬杖」は手を頬の下に置く、「机を叩く」という項目には指先で机を叩いたり、パズルで机を叩いたりする行動が含まれる。

言葉項目では自分への独り言と実験者への発話の大きく2種類に分けた。また、実験者への発話では「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」と「実験者に話掛ける」に分けた。「実験者にパズルのやり方を言葉で聞く」という項目は“これどこ”のような疑問文である。「実験者に話掛ける」という項目には“分からない”などの自己主張、パズルのやり方についての尋ねる以外の文が含まれていた。

表情項目は「眉間に皺を寄せる」、「眉毛を上げる」、「口を動かす」、「微笑む」、「ため息をつく」、「そしゃく、舌打ち等」という6項目であった。「眉間に皺を寄せる」は眉間に皺を寄せる行動、「眉毛を上げる」は片方または両方の眉毛を上にあげる行動、「口を動かす」は口が動いたり、開けたりする行動、「微笑む」は口角が上にあがる、微笑む行動、「ため息をつく」は音出す、または無声のため息をつく行動、「そしゃく、舌打ち等」はそしゃくや、舌打ちのような行動である。

#### 4.3.4.2 コーディングの仕方



10 秒間ごとにコーディングした。10 秒間以内で項目の有無を記録し、10 秒間以内で 1 回以上出現しても 1 回とした。

#### 4.3.4.3 信頼性

データは筆者と 20 代の日本人 1 人が記述したものであった。2 人が記述したものがどれだけ信頼性のあるものかを検討するために、Loewen & Philp (2006) の研究を参考にし、ランダムに 10% の子ども ( $n=3$ ) のデータを選択し、カッパ係数を求めた。その結果、 $k = .746$  という高い値が確認された。

#### 4.3.5 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し子どもの保護者と保育園の園長の同意を得、インフォームドコンセントを得た。

また、この実験と観察は聖心女子大学心理学科倫理委員会の承認のもとで行われた(4 歳のデータは後で加えられた)。

### 4.4 結果

#### 4.4.1 全体の行動の相違

年齢とパズルを独立変数にして、各パズルの行動項目数を従属変数として、2 要因分散分析を行った。その結果、パズルにおける主効果が有意であった ( $F(2, 69) = 5.52, p < .001, \eta^2 = .138$ )。年齢による主効果は認められなかった (*n. s.*)。パズルと年齢の交互作用もみられなかった (*n. s.*)。

下位検定を行ったところ、パズル 1 とパズル 2 の差が 5%水準で、パズル 2 と

パズル 3 の差が 0.1%水準で有意であった。パズル 1 とパズル 3 の差は有意ではなかった。

以上のように、3つのパズルにおいて、パズルによって、子どもの行動の差があることが示された。

#### 4.4.2 パズル 2 について

##### 4.4.2.1 カテゴリーの比較

完成できない課題に取り組む際、4歳児と3歳児の行動の相違を検討するため、二つ目のパズルでみられた行動の相違を詳しく分析した。4歳児と3歳児の16の行動を「動作」、「言葉」と「表情」3つカテゴリーに分け、年齢を独立変数にして、行動の回数を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、「動作」カテゴリーでは年齢による主効果は認められなかった (*n. s.*)。「言葉」でも年齢による主効果は認められなかった (*n. s.*)。「表情」では年齢の主効果が見られた ( $F(1, 24) = 6.331, p = .019, \eta^2 = .216$ )。

以上のように、カテゴリーでみると、「表情」というカテゴリーでは、4歳児の行動回数が有意に多いことが分かった。

##### 4.4.2.2 各項目の比較

そこでさらに、二つ目のパズルの16項目のうちどの項目に年齢の差があるかを検討した。年齢を独立変数、行動項目の回数を従属変数として、1要因分散分析を行った結果は、「眉間に皺を寄せる」、「ため息をつく」の2項目に年齢の主効果が見られた（「ため息をつく」 $F(1, 24) = 8.83, p < .01, \eta^2 = .277$ ）；「眉間に皺を寄せる」 $F(1, 24) = 5.42, p < .05, \eta^2 = .191$ ）。以上のように、

年齢による差が認められた項目と認められなかった項目があることが分かった。

#### 4.4.3 パズル1とパズル3を完成した時間の比較

4歳児と3歳児の学習効果の有無及びその差を確認するため、パズル1とパズル3を完成した課題の解決時間をみた。パズルと年齢を独立変数にして、パズルの解決時間を従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、パズルにおける主効果はみられなかった (*n. s.*)。年齢による主効果は有意であった ( $F(1, 48) = 9.05, p < .01, \eta^2 = .159$ )。パズルと年齢の交互作用はみられなかった (*n. s.*)。

#### 4.4.4 3つのパズルを始めた時の行動の比較

これまでは各パズルにおいて、行動項目の生じる状況について検討したが、ここでは、パズルが変わった時、子どもの行動に変化があるかどうかをみる。例えば、二つ目のパズルを見た時、難しいと認識するかどうか、難しいと認知した場合行動があるかどうか、また三つ目のパズルを見た時、簡単だと認識するかどうかなどを3、4歳の子どもにおいて、検討した。

まず、パズル1において、最初の10秒の間、行動がみられた4歳児は8名、行動がみられた3歳児は7名であった。3、4歳児の差は有意ではないことが分かった (*n. s.*)。そして、パズル2において、行動が見られた4歳児は11名、行動が見られた3歳児は5名であった。フィッシャーの直接法 (Fisher's exact test) で検討したところ、3、4歳児の差は有意傾向であった ( $p < .10$ )。パズル3において、行動が見られた4歳児は8名、行動が見られた3歳児は6名であった。同様に、3、4歳児の差は有意ではないことが分かった (*n. s.*)

以上のように、簡単な2つのパズルは最初10秒間の行動の有無では3、4歳児の差がみられなかった。また、難しいパズル2では3、4歳児の間の差に有意傾向がみられた。

#### 4.4.5 パズルが終わった時の行動の比較

前節ではパズルに取り組む時、3、4歳の子どもが開始した時の行動反応の相違を検討したが、明らかに「成功」した場合には相違があるかどうかを検討するため、25名全員完成したパズル1とパズル3の終わった時の行動を検討する。

まず、パズル1において、行動が見られた4歳児は14名、行動が見られた3歳児は9名であった。フィッシャーの直接法(Fisher's exact test)で検討したところ、3、4歳児の差は有意傾向であることが分かった( $p < .10$ )。そして、パズル3において、4歳児に反応が見られたのは14名、3歳児に反応が見られたのは8名であった。同じく、フィッシャーの直接法で比較したところ、3、4歳の子どもの差がみられた( $p < .05$ )。

以上の結果のように、パズル1とパズル3の完成した際の反応は3、4歳児の差があることが分かった。

#### 4.4.6 3つのパズルの難易度についての回答

パズルの難易度について、尋ねたところ、言葉で「簡単」または「難しい」と答えた子どもの人数を確認した。一つ目のパズルについて、4歳児11名、3歳児5名であった。二つ目のパズルについて、4歳児10名、3歳児6名であった。三つ目のパズルについて、4歳児11名、3歳児6名であった。

3歳児に比べて、4歳児のほうが「簡単」「難しい」とはっきりと返事する子が多かった。

#### 4.4.7 3ヶ国の子どものデータの比較

3つのパズルに取り組む時、研究1と共通している12項目を用いて、研究1の結果と比べた。3つのパズルにおいて、国籍を独立変数にして、各パズルの行動項目数を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、一つ目のパズルにおいて、3ヶ国間の差が有意であった ( $F(2, 53)=4.82, p<.05, \eta^2=.154$ )。二つ目のパズルにおいても ( $F(2, 53)=10.42, p<.001, \eta^2=.282$ )、また、三つ目のパズルにおいても、3ヶ国間の差が有意であった ( $F(2, 53)=5.55, p<.01, \eta^2=.173$ )。

下位検定を行ったところ、有意だったのはパズル1とパズル3では、日本と中国の子どもの行動の差が1%水準、パズル2では、日本と中国の子どもの行動の差が0.1%水準であった。

いずれのパズルにおいても、韓国の子どもは日本の子どもより多く行動がみられたが、中国の子どもより少なかった。この結果から、韓国の子どもが問題に取り組む時、中国の子どもほど行動を表出しないが、日本の子どもより表現することが分かった。3つの国の中では、日本の子どもが最も自分の感情を出現しないことが分かった。

また、パズルに取り組む際、みられた言葉をみてみると、明らかに中国の子どもたち発話の種類が多かった。日本の子どもにみられた発話の内容は4種類(「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」・「時計の話をする」)で、中国の子どもにみられた発話の内容を分類すると、「困難

だと認め、言う」・「自分の意思を表す」・「できないことを言う」・「パズルの内容を言う」・「雑談をする」・「自分の成果をみせる」・「やり方の解説」・「他人のことを聞く」・「簡単だと表現する」・「パズル内容からの連想」の10種類であった。韓国の子どもにみられた発話は3種であった（「パズルの内容を言う」・「困難だと認め、言う」・「できないことを言う」）。

#### 4.5 考察

パズル課題において、日本と中国の子どもの行動の違いを明らかにしたFu(2018)の研究に基づき、本研究では韓国の子どもの行動を分析した。韓国、日本、中国は、歴史、言語、政治様式、習慣など様々な面で異なっている、それは北山(1994)が定義した文化の概念と一致している。同じ東アジアの中でも国により、人のコミュニケーションの仕方、感情表出の違いがあると考えられる。ところが、幼児を対象にした研究はほとんどない。

そこで、本実験では、韓国の子どもの協力を得て、日本と中国の子どもたちと同じパズル課題に直面する際の行動を検討した。以前の研究で使用した項目に基づき(Fu, 2015, 2018)、新しい項目も取り入れ、韓国の子どもの行動を検討した。その結果、(1)課題の難易度により、3歳と4歳の子どもたちの行動に差はみられなかった(2)難しい課題に取り組む時、表情において、3,4歳の子どもの差がある(3)同じレベルの課題においても、取り組む経験により、3,4歳の子どもとも課題解決の時間が短くなる(4)パズル課題の難易度により、課題に取り組む最初の反応は4歳児に多くみられた(5)簡単な課題を完成した場合、3,4歳児の行動の違いがない(6)子どもに課題の難易度について、4歳児の方がはっきり

答えた子どもが多かった。韓国の3, 4歳の子どもはどう違っているか、以上の結果にもとづいて論じる。

#### 4.5.1 全体の行動の違いについて

まず、パズルに取り組む時、パズルの難易度によって、4歳児と3歳児の行動の違いが見られなかったが、本研究におけるパズル課題では、3, 4歳児問わずに、簡単なものよりも複雑なほうが行動がみられた。その結果から、簡単な課題よりも複雑な課題を処理する際、多くの行動が情動の変化により出現するのではないかと考えられる。

#### 4.5.2 難しいパズルにおいて

また、難しいパズル（パズル2）において、カテゴリーで子どもの行動の違いをみると、「動作」「言葉」「表情」3つカテゴリーの中では、「表情」のみ3, 4歳児の差がみられた。

そして、詳しく各項目で相違をみてみると、カテゴリー「動作」と「言葉」の下位項目では3, 4歳児の行動の差が見られず、カテゴリー「表情」の下位項目の「眉間に皺を寄せる」と「ため息をつく」という2つの項目では4歳児のほうが多くみられた。その結果から、3, 4歳児の子どもが難しい課題に取り組む際に、必ずしも全ての行動において差があるとは言えないことが分かった。

#### 4.5.3 パズル1とパズル3を完成した時間の比較

3歳児と4歳児いずれも2つの簡単なパズルにおいては、パズル1よりパズル3のほうが完成する時間が短くなった結果が統計的に有意ではなかった。3歳児

より 4 歳児の方が短時間で完成させることから認知発達が考えられる。

#### 4.5.4 3つのパズルを始めた時の行動の比較

容易な課題-困難な課題-容易な課題の順番で、最初の 10 秒間の行動の有無の比較を通し、3, 4 歳児のパズルに対する行動の違いを検討した。簡単な 2 つのパズルは最初 10 秒間の行動の有無では 3, 4 歳児の差がみられなかった。また、難しいパズル 2 では 3, 4 歳児の間の差の有意傾向がみられたことから、簡単な課題よりも困難な課題に対して行動が出現しやすいと考えられる。子どもがパズルに対して感情の変化を起こしていると推測される。また、子どもは課題に取り込み始めて 10 秒という短い間でパズルの難易度について、認知できていると推測できる。

#### 4.5.5 課題が終わった時の行動

パズル 1 とパズル 3 の完成した際 4 歳児は 3 歳児より多くの子どもたちに反応がみられた。その結果から同じ完成できた課題においても、年齢によって、子どもたちの反応の違いがあることが推測できる。

#### 4.5.6 課題の難易度についての回答

結果 4.4.6 で、3 歳児に比べて、4 歳児のほうが課題の難易度についてはっきりとした返事がみられた結果から、3 歳児より 4 歳児のほうが発話ができてることが考えられる。その結果は実験後自由遊び場面で観察されたことと一致している。実験後 30 分の自由遊びの時間では、3 歳児にほぼ言葉のやりとりがみられず、4 歳児のほうが言葉によるやりとりが明らかに多かった。本実験の結果



に合わせてみると、筆者が対象にした韓国の子どもの言葉の発達は 4 歳になると、一気に進むことが推測できる。

#### 4.5.7 3ヶ国の子どものデータの比較

3ヶ国の子どもの平均回数を比較した結果から、3ヶ国の子どもが課題に取り組む時、行動の違いだけではなく、初対面の人に会う時、中国の子どもが話掛け、最も積極的に関わろうとする可能性があると考えられる。また、人に慣れてくると、緊張なく付き合えるようになっていくだろう。

本研究の結果から中国の子どもが最も積極的に、相手のことを恐れずに、関わろうとする傾向があるといえるかもしれない。本研究は子どもが対象になっているが、生活の一貫性、環境の一貫性等を考えると、大人になっても、3ヶ国の中で、最も人と積極的に関われそうなのは中国人ではないだろうか。

本研究においては、パズル課題を行うことで、韓国の3、4歳児の行動の相違を検討することができた。また、東アジアの3つの国の子どもの行動の違いの検討もできた。

Fu (2018)の結果に比べて、中国の子どもたちは日本、韓国の子どもたちに比べて、難しい課題に取り組む時、最も表情を表しやすく、また、中国の子どもたちが最も言葉による情動を表しやすい傾向がみられた。表情の出し方と対人行動は密接に関係していると考えられる。動作、言葉、表情などの形で情動を表現することは文化に影響されているといえよう。

本研究においては、サンプリングの関係で、性差について検討しなかった。より広いサンプルをとる必要があるかもしれない。

## 4.6 追加実験

### 4.6.1 問題・目的

研究2では、3歳児の実験者は筆者であったため、実験者の言語の問題があると考えられる。その影響の有無を検討するため、韓国人を実験者とする追加研究を行った。

### 4.6.2 方法

#### 4.6.2.1 実験者・実験協力者・場所

韓国人女性1名を実験者にし、韓国の子ども男児1名(C)と女児1名(D)に協力してもらった。Cは実施日の時点で3歳6ヶ月で、Dは実施日の時点で3歳4ヶ月であった。実施した場所は研究2の本実験で使用した同じ部屋であった。

#### 4.6.2.2 手続き

実験方法と実験で使用した道具は研究2で使用した物であった。また、実験手続きも研究2と同じであった。実験者に事前に実験の手順マニュアルに従うようにと説明し、また、録画した1名のデータを子どもの顔にモザイクを付けた状態で見せた。

実験中、筆者が実験に介入することがなかった。

#### 4.6.2.3 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し子どもの保護者と保育園の園長の同意を得、インフォームドコンセントを得た。

### 4.6.3 結果

#### 4.6.3.1 3つのパズルにおいて、全体の比較

パズル毎で、CとDとも実験2の3歳児の平均回数より少なかった。

#### 4.6.3.2 二つ目のパズルにおいて、カテゴリーの比較

各カテゴリーでみられた行動の平均回数,本実験におけるCとDの平均回数,3歳児との比較をした。動作はC,Dとも3歳児の平均回数より少なかった。言葉はCもDも3歳児より少なかった。表情はC,Dとも3歳児より少なかった。

#### 4.6.3.3 二つ目のパズルにおいて、カテゴリーの比較

CとDの二つ目のパズルで、各項目でみられた行動の平均回数,本実験における,3,4歳児との比較を比較した。行動「姿勢変わる」,「口を動かす」はCが多かった。「頭を掻く」はDが多かった。「眉間に皺を寄せる」はCと3歳児の平均と同じくらいだった。それ以外の行動項目は全部3歳児が最も多かった。

#### 4.6.3.4 3つのパズルを始めた時の行動

CとDが3つパズルを始めた時の行動を比べた。Cは一つ目と二つ目のパズルを始めた10秒の間に「頭を掻く」,「姿勢が変わる」,「眉毛を上げる」がみられ,三つ目のパズルではなかった。Dには一つ目と三つ目のパズルでは行動が見られなかったが,二つ目のパズルでは「独り言」があった。

#### 4.6.3.5 3つのパズルの難易度についての回答

三つのパズルの難易度の質問において,一つ目のパズルでは,Cは言葉で“簡

単” , D は返事なしだった。二つ目のパズルでは, C は言葉で“難しかった” , D は頭を下げた。三つ目のパズルでは, C は言葉で“簡単” , D は返事なしだった。C と D の返事が異なっていることが分かった。

#### 4.6.4 考察

C と D のデータの個人差が多くて, 実験者の言語の影響の有無について, 検討できなかった。

## 第5章 動画鑑賞における日本、中国、韓国の幼児の行動の比較「研究3」

本研究は、今後1年以内に出版される可能性があるため、図表を削除し、全文に代えて要約を記す。

### 5.1 目的

第1章で述べたように、感情表現規則、感情表現のタイプに関してたくさんの研究がなされてきた(例えば Ekman, 1972; Matsumoto, Yoo, & Nakagawa, 2008)。その結果、明らかなのは感情の表現は社会文化的で、複雑であり、ダイナミックで、文脈と発達を反映するものであるということである (Barrett, Mesquita, Ochsner, & Gross, 2007; Barrett, 2012; Immordino-Yang, 2010)。

表情は感情を表すだけではなく、他の精神活動、社会的相互作用および生理学的な信号でもある (Fasel & Luetten, 2003)。従って、表情の特徴を比べることを通して、社会的要因が表情に影響を与えているかどうか検討することは可能である。

成人の研究 (Ekman & Friesen, 1971) において、一人の時は、アメリカ人と日本人の参加者の表情に違いがみられなかったが、面接者が同席すると日本人はアメリカ人よりも微笑み、嫌悪感を表わさなかった。

以上述べてきたように東洋人と西洋人は感情表出に違いがあるといわれているが、同じ東アジアの子どもたちの感情表出に違いがあるかどうか確認する必要がある。日本、中国、韓国の子どもたちの動画視聴時の行動を比較検討するため、本実験を行なう。

## 5.2 方法

### 5.2.1 実験参加者

すべて 3 歳児を対象として日本の典型発達児 15 名，中国の典型発達児 15 名と韓国の典型発達児 13 名，計 43 名が実験参加者であった。有効データは日本の子ども 15 名 ( $M=3.7$  歳， $SD=0.04$ )，中国の子ども 14 名 ( $M=3.8$  歳， $SD=0.04$ )，韓国の子ども 13 名 ( $M=3.5$  歳， $SD=0.03$ ) となった。

### 5.2.2 手続き

#### 5.2.2.1 装置

動画を再生するノートパソコン (MacBook) と動画の DVD であった。

日本，韓国と中国の言語の違い，絵に対する慣れなどの違いを避けるため，アメリカの動画を使用した。合わせて 3 本の動画を見せた。動画の 2 本は Tom and Jerry (5 分 35 秒 (V1) と 6 分 13 秒 (V3) の短編動画) で，もう 1 本の動画は Fantasia の一部 (7 分 55 秒，V2) だった。V1-V2-V3 の順番で呈示した。

録画装置としてはデジタルカメラ Cyber-shot とデジタル HD ビデオカメラレコーダーHDR-PJ790 (SONY 製) と三脚 (Velbon の cs200) を利用した。

#### 5.2.2.2 手続き

実験を実施した場所は保育園内の独立した部屋であった。同じ部屋にいるのは子どもと実験観察者の 2 人であった。実験参加者が入る前に実験観察者が録画装置を設定し，スイッチをオンにしてあった。実験観察者は子どもの右側または左側に座り，子どもに“今日はある動画をおみせします。”と説明した。

### 5.2.3 分析方法

評定項目は2つであった。両方とも10秒間ごとにコーディングした。1本目の動画は5分35秒、2本目の動画は7分55秒、3本目の動画は6分13秒であった。故に1本目の動画は34回 $(6 \times 5 + 3 + 1)$ 、2本目は48回 $(6 \times 7 + 5 + 1)$ 、3本目は38回 $(6 \times 6 + 1 + 1)$ のコーディングであった。

最初の評定項目は子どもが動画をみているかどうかについてであり、「3:よくみている; 2:みている; 1:あまりみしていない」3段階で評定した。評定するポイントは子どもがどのくらいの程度で動画を見続けられたことであった。子どもが動画をみている時間を計り、10秒間で9秒以上みていたのは3、9秒~5秒みていたのは2、みていたのが5秒以下のものは1と評定した。

もう一つの評定項目は子どもが動画鑑賞中の表情も含む行動を「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」の3種類に分けるというものであった。ポジティブな行動の例は「笑い」、「面白い」という発話などであった。「笑い」の場合は、「笑い」という表情が出現された原因を問わず、全ての「笑い」を「ポジティブ」行動としてカウントした。ニュートラルは、いわゆる無表情で動画をみる行動とした。ネガティブな行動には、「眉間に皺寄せる」「ため息をつく」「怖い」という発話などを入れた。ポジティブは3、ニュートラルは2、ネガティブは1を評定した。

### 5.2.4 信頼性

日本人1人と筆者1人がビデオをみながら評定したデータを比較した。2人の評定がどれだけ信頼性があるものかを検討するために、Loewen & Philp (2006)の研究を参考にし、ランダムに14%の子ども(n=6, 各国籍グループ2名ずつ)

のデータを選択し、カッパ係数を求めた。その結果、 $k = .75$  という高い値が確認された。

### 5.2.5 研究倫理

本研究の目的、手順、データの処理、保管などについて、または、子どものプライバシーを保証することを説明し、保育園の園長または責任者の同意を得、文書によるインフォームドコンセントを得た。

この実験は聖心女子大学心理学科倫理委員会の承認のもとで行われた。

## 5.3 結果

### 5.3.1 動画をみている程度について

国籍により、子どもたちが動画をみている程度を調べるために、国籍を独立変数にして、動画をみている程度を従属変数として、1 要因分散分析を行った。その結果、三つの動画とも、国籍における効果は有意ではなかった (*n. s.*)。

3 つの動画において、各国の子どもの動画をみる程度の平均点数の比較からみても大きい差がみられなかった。

### 5.3.2 行動について

動画ごとに国籍を独立変数にして、行動評定値を従属変数として、1 要因分散分析を行った。その結果、3 つの動画において、国籍における効果は有意ではなかった (*n. s.*)。

3 つの動画において、各国の子どもの行動の平均点数の比較からみても大きい差がみられなかった。動画 1 ではほとんど同じくらいで、動画 2 でも日本の



子どもたちの方がやや高く、韓国の子どもたちの方がやや低めであった。動画 3 では中国の子どもの方が他の 2 つの国の子どもよりやや高かった、日本の子どもの方がわずかに韓国の子どもたちより低かった。

### 5.3.3 動画 1 における行動の違い

動画をみている時、行動内容がどうに違っているのかを確認するため、「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」3 種類それぞれでみた。3 種類の行動において、国籍を独立変数にして、行動を従属変数として、1 要因分散分析を行った。その結果、3 種の行動とも国籍による主効果が見られなかった (*n. s.*)。

動画 1 において、各国の子どもの 3 種類の行動の平均点数を比較したところ、ポジティブな行動では日本の子どもたちの方が最も高かった、韓国の子どもたちの方が低かった。ニュートラルな行動ではほとんど同じだったが、中国の子どもたちの方が稍高かった。ネガティブな行動では日本の子どもたちの方が最も高かった、中国の子どもたちの方が稍高かった。

### 5.3.4 動画 2 における行動の違い

動画 2 についても同様に動画をみている時、反応内容が違っているのかを確認するため、「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」3 種類それぞれでみた。3 種類の行動で国籍を独立変数にして、行動評定値を従属変数として、1 要因分散分析を行った。その結果、ポジティブな行動で  $F(2, 41) = 5.26, p < .01$  で、国籍の主効果がみられた。下位検定を行ったところ、日本と中国の違いには  $F(1, 28) = 3.85, p < .10, \eta^2 = .125$  で有意傾向がみられた。日本と韓国では  $F(1, 27) = 7.48, p < .05, \eta^2 = .223$  で有意差がみられた。行動の平均点数でみると、

日本の子どもたちの方が最も高かった，韓国の子どもたちの方が低かった。ニュートラルとネガティブな同様に国籍を独立変数にして，行動評定値を従属変数として，1 要因分散分析を行った結果，国籍における主効果は有意ではなかった (*n. s.*)。ニュートラルな行動の平均点数からみると，中国の子どもたちの方が稍高く，日本の子どもたちの方が稍低かった。ネガティブな行動の平均点数からみると韓国の子どもたちの方が最も高かった，中国の子どもたちの方が最も低かった。

### 5.3.5 動画 3 における行動の違い

動画 3 についても国籍を独立変数にして，行動評定値を従属変数として，1 要因分散分析を行った。その結果，ポジティブな行動のみ，国籍による違いに有意傾向がみられた ( $F(2, 41) = 2.52, p < .10, \eta^2 = .182$ )。下位検定を行ったところ，日本と韓国間の違いでは  $F(1, 28) = 3.85, p < .10, \eta^2 = .185$  で有意傾向がみられた。中国と韓国間では  $F(1, 27) = 7.48, p < .05, \eta^2 = .185$  で有意差がみられた。ポジティブな行動の平均点数からみると，中国の子どもたちの方が最も高かった，韓国の子どもたちの方が最も低かった。

ニュートラルとネガティブには国籍における主効果は有意ではなかった (*n. s.*)。ニュートラルな行動の平均点数からみると，韓国の子どもたちの方が日本と中国の子どもたちより稍高かった，日本と中国の子どもたちには差が殆どなかった。ネガティブな行動の平均点数では，3ヶ国の子どもたちの間には差は殆どなかった。

### 5.3.6 3つの動画における行動の一貫性

子どもたちが 3 つの動画を観る時、子どもの反応行動に一貫性がみられるかどうかを調べるために、相関分析を行った。その結果、3 つの動画の間ともにも正の相関関係が認められた(動画 A と動画 B :  $r = .432, p < .01$  ; 動画 B と動画 C :  $r = .452, p < .01$  ; 動画 A と動画 C :  $r = .633, p < .001$ )。

#### 5.4 考察

3 ヶ国の子どもたちに同じ動画をみせ、動画をみる時の行動の違いを比較した。

結果 5.3.1 によると、3 ヶ国の子どもが動画をみることについては、みていたかみていなかったかについて、差がなかったことが分かった。3 つの動画に関して、3 ヶ国の子どもともよく動画をみていたということだろう。

結果 5.3.2 では 3 つの行動「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」を評定し、平均点数でみたところ、差がなかった。5.3.4 と 5.3.5 のように動画を行動ごとに分けてみたところ、動画 2 では日本の子どもにポジティブな行動が多くみられ、動画 3 では中国の子どもにポジティブな行動が多くみられた。韓国の子どもにはポジティブな行動があまりみられなかったことが分かる。

Ekman(1972)の研究結果では日本人とアメリカ人の大学生は緊張する場面の映画を見る時、同じような表情反応であった。Ekman & Friesen (1971)の研究結果ではストレスフルなシーンをみた時、日本人はネガティブな表情の時、アメリカ人より多く顔を隠した。本研究では動画 2 と動画 3 で日本と中国の子どもたちの方が韓国の子もたちよりポジティブな行動を示した。考えられるのは以下の 2 つの理由である。まず、動画 2 について、動画 1 と比べて、動画 2 の方が楽しい場面が少なく、怖い場面が多く、全体も暗めである。日本の子どもたちは暗い動画でも面白い場面を見ると行動を示したことから、日本の子どもたち

は1つ1つの刺激によく丁寧に反応していることが考えられる。また、動画3でも日本と中国の子どもたちの方が韓国の子どもたちよりポジティブな行動を多く示す傾向があった。それは日本の子どもは2つ目の暗めの動画にひき続き、3つ目の動画にもよくみて、行動したと推測できる。1つ目の動画でみる課題に慣れ、その後の2つ目と3つ目の動画を積極的に体験することができたのだろう。動画3では、中国の子どもたちに最もポジティブな行動がみられた。それは中国の子どもたちは動画2をみた後面白い動画3をみる時、より楽しさを感じたからだと推測できる。

韓国の子どもがポジティブな表情を出さない結果から、同じ3歳児でも、国によって、子どもの発達の様子が異なっている可能性があると考えられる。

本研究では、日本、中国、韓国の子どもたちが動画を視聴する時、韓国の子どもたちが最も行動を示さなかった。また、日本の子どもたちの方が韓国の子どもたちよりポジティブな反応を示した。動画にだけでなく、人にもよくポジティブな対応する可能性が大きいと推測できる。Maynard (1997) は日本人とアメリカの学生の会話中に使われたバックチャンネルを比較し、日本人の方がよくうなづきなどの頭の動きを使用していることを明らかにしている。日本人の微笑みやうなづきを含むポジティブな反応は単なる感情表現ではなく、相手に対する礼儀や思いやりなどもあると考えられる。

本研究は感情を出さないようにすると言われてきた文化背景の日本、中国と韓国の幼児の比較である。また、文化は時間と流れと共に変化可能なものであるため(南, 2007)、本研究の結果は現時点での日本、中国と韓国の幼児が動画を見る時の反応であり、文化の変化を考えるためには、縦断的研究が必要であると考えられる。また本研究の対象児たちで得られた結果であることもいうまでもな

い。

### 5.5 今後の課題

本研究は日本、中国と韓国の子どもが動画を見る時、行動の違いを検討した。この方法は国による、幼児の表情表出の分析に役立つと考えられる。本研究ではサンプルの関係で、性別の差を検討することができなかった。

また、動画を見ている場面では、アイトラッカーを使わなかったため、測定誤差が生じていた可能性も考えられる。アイトラッカーを使った方がより精密なデータが得られるだろう。

## 第6章 概括

これまで、日本、中国をよく東洋文化の代表として、「西洋文化」と言われる国と比較されてきた。本論文では3つの研究により、そのような比較方法が問題はないのか検討した。

研究1では、日本と中国の3歳児を対象として、パズル課題に対する行動を分析した。その結果、3つのパズル全てにおいて、中国の子どもたちの行動の方が日本の子どもたちよりも多かった。日本の子どもたちと中国の子どもたちでは、同じ課題に対して行動が異なったのである。

研究2では韓国の3歳児と4歳児を対象として、パズル課題に対する行動を分析した。その結果、4歳児の行動の方が3歳児よりも多かった。また、研究1の結果と比べると、3つのパズルにおいて、中国の子どもたちの行動回数が最も多かった、日本の子どもたちの行動回数が最も少なかった。

研究3では、日本、中国、韓国の3歳児を対象として、動画鑑賞課題に対する行動を分析した。その結果、3つの行動「ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ」を評定し、平均点数でみたところ、差がなかった。動画ごとに分けてみたところ、動画2では日本の子どもにポジティブな行動が多くみられ、動画3では中国の子どもにポジティブな行動が多くみられた。韓国の子どもにはポジティブな行動があまりみられなかった。

本研究の2つの材料（パズルと動画）の結果をまとめて考えると、課題によって、3ヶ国の子どもの行動回数の順位が変わることが分かる。それは高野（2008）の日本とアメリカ人の集団行動に関する19つの研究の分析した結果（第1章）と一致していると考えられる。高野（2008）は、19の研究をまとめると、多くの研究が日本人とアメリカ人の差を見出しておらず、日本人の方がアメリカ人

よりも個人主義的という結果を示しているものもあったと述べている。

高野（2008）は、日系アメリカ人の心理学者ディウイド・マツモトの研究を以下のように紹介している。マツモトは日本人とアメリカ人に集団主義的、個人主義的の程度を測るための質問紙研究を行なった。例えば、「重要な決定をする時、あなたは友人のアドバイスに従いますか。」のような質問があった。日本人とアメリカ人の平均値を比べると、相手が友人や同僚の場合には日米の差がなかった。しかし、相手が家族の場合には、日本人の方が個人主義的だった。日本人論の通説とは正反対だったのである。さらにマツモトはデータの分散を調べた。分析の結果、日米間の文化差による分散は、全体のうち 10%弱で、残りの 90%以上は個人差から来ていた。即ち、集団主義的または個人主義的に行動するかには、個人による違いがとても大きいことが分かったのである。

高野（2008）は、マツモトの分析を更に紹介している。マツモトは個人間の分散と個人内の分散を比較した。個人内の分散とは、個人が質問に対して示したバラツキである。状況が変わった時に、集団主義、個人主義が変わることを意味している。個人間の分散は日本でもアメリカでも分散全体の 20%ほどしかなかった。個人内の分散は 80%を占めていた。集団主義・個人主義の程度は性格の違いよりも状況の違いの方が大きいな影響力を持っていたことを意味する。

最後に、高野（2008）は、マツモトの研究結果を Figure 6-1 のようにまとめている。文化の影響力はこれほど小さいということである。



Figure 6-1 調査研究の回答に対する影響力（高野，2008）

以上の高野（2008）の考察から本研究の結果を分析するには、本研究の対象児の数は少ない。より多くのデータを得ることが必要であろう。

Deng, You & Sai（2019）は21名の漢族中国人と21名のウイグル族中国人を対象として、社会的肯定的および非社会的肯定的刺激を処理している時、脳における事象関連電位（ERP）変化を通して、サブカルチャーの違いを検討した。社会肯定的刺激に対して電位変化が、漢族よりもウイグル族の方が大きかった。非社会的肯定的刺激に対しては有意差はなかった。このように、Deng et al.（2019）の研究から1つの国でも当然のことながら、結果は多くの要因によって影響されることが分かる。「国」という考え方だけでは成り立たないことを示した。

国という単位でなく研究を進めるとするなら、どのような視点を取り得るのであろうか。Henrich（2016/2019）によると、アルコールを分解できる遺伝子を持つ人々はアルコールを飲み過ぎた時と吐き気、動悸などが起こるので依存症になる可能性が低い。この遺伝子を持つ人々は中国南東部を中心に広がっている。

またこの遺伝子型の分布を東アジアの稲作の開始時期についてのデータと重ねると、稲作の開始時期が早い地域ほど遺伝子の出現頻度が高いことも明らかであった。農耕の開始とともにアルコールが作られたので、この遺伝子を持った人が有利になる自然選択が作用したと考えられている。

また、ラクターゼという乳糖分解酵素を持たないとミルクを分解できない。ほとんどの人は離乳期を過ぎると、この酵素の産出ができなくなるが、ヨーロッパ、アフリカ、中東などには大人になってもミルクを消化できる人々がいる。そのような人は乳糖耐性を持つ、といわれる。東アジアでは、この遺伝子を持つ人はまれである（Henrich, 2016/2019）。



乳糖耐性遺伝子の分布には、牧畜が関係していると考えられている。乳糖耐性を獲得した集団は、牧畜を続けてきたことがわかる。乳糖耐性には、ただ牧畜だけでなく、日照時間や乾燥などの地域特性も関連したと考察されている (Henrich, 2016/2019)。

以上のアルコール分解酵素、乳糖分解酵素のデータは、人の違いを考える時に国というような境界線は意味がないことを示している。Henrich (2016/2019) のことばを借りれば「遺伝子の分布は連続的なものであって、そもそも境界線など存在しない (p.146)」のである。

Thomson, Yuki, Talhelm, Schug, Kito, Ayanian, Becher, Bceker, Chiu, Choi, Ferreira, Fülöp, Gul, Houghton-Illera, Joasoo, Jong, Kavanagh, Khutkyy, Manzi, Marcinkowska, Milfont, Neto, Oertzen, Pliskin, Martin, Singh, & Ferreira (2018)は39ヵ国の人間関係の流動性、個人行動と生業形態との関係について測り、環境の脅威（疾病、戦争など）、農業の形式と人間関係の流動性と関係していることを報告している。歴史的にみても日本、中国と韓国の気候や生業形態などにも大きい違いがあり、気候によっても、人が生存するための行動様式や生業形態は当然異なってくる。行動様式には継承性がある。上の世代が下の世代を育てる際、自分の経験から生み出した「必要なものや能力など」を次の世代に押し付けたり、望んだりする事も可能だろう。言い換えると、異なる気候や生業形態により、生存するためのニーズも違ってくる。原始社会と現代社会では、必要なものに関するニーズも変わった。すなわち基本的な生きる事に対するニーズから多様で複雑なニーズに変化したのである。

前述したように、中国といっても面積が広く、民族が多い国である、香港、マカオなど中国であるが、本土の政治体制と異なっている。また昔は中国の一部で

あった台湾なども含めて検討することも課題である。

また、本研究結果から考えられるのは、同じ東アジアの国でも子どもたちの行動が状況によって、異なっている事から、文化を比較する際には、物差しを慎重に選ばないといけないことである。

これまでの文化心理学で取られてきた“集団主義・個人主義”，“西洋・東洋”，“アメリカ・日本”などの視点，“東アジア”として日本や中国・韓国などを一括りにする視点は見直される必要があるだろう。遺伝子や気候，生業形態，ニーズや具体的な状況なども考慮にいったより全面に新しく視点を見出さなければならぬである。

中国の7月のニュース記事（村山,2019）によると「ラオス人の中には空港で外国人を見かけると、日本人か中国人か、それとも韓国人かを見分けられる人もいる」。記事で挙げられた例はツアー客が喋る様子の違いであった。このように他国からみた日本・中国・韓国人の違いを考察することも同じ東アジアの国にとって、相互理解に必要となっていくのだろう。

本論文が明らかにしたことは3か国の子どもたちの行動の違い，というささやかなことであるが、日本・中国・韓国の相互理解に少しでも寄与することがあれば，と考える。

## 引用文献

- 荒木 晶子 (2011) 日本人はなぜ話すのが苦手なのか 荒木晶子・藤木美奈子  
(共著) 自分を活かすコミュニケーション力 実教出版社, pp.2-40.
- Barrett, L. F. (2012). Emotions are real. *Emotion*, 12(3), 413-429.
- Barrett, L. F., Mesquita, B., Ochsner, K. N., & Gross, J. J. (2007).  
The experience of emotion. *Annual Review Psychology*, 58, 373-403.
- Bond, M. H., & Tornatzky, L. G. (1973). Locus of control in students  
from Japan and the United States: Dimensions and levels of response.  
*Psychologia: An International Journal of Psychology in the Orient*.  
6(4), 209-213.
- Bornstein, M. H., Miyake, K., & Tamis-Lemonda, C. (1987). A cross-  
national study of mother and infant activities and interactions:  
Some preliminary comparisons between Japan and the United States.  
*RESEARCH AND CLINICAL CENTER FOR CHILD DEVELOPMENT Annual Report*, 9,  
1-12.
- Bornstein, M. H., Tamis - LeMonda, C. S., Ludemann, P., Tal, J., Toda,  
S., Rahn, C. W., Pecheux, M., Azuma, H. & Vardi, D. (1992). Maternal  
responsiveness to infants in three societies: The United States,  
France, and Japan. *Child Development*, 63(4), 808-821.
- Brazelton, T. B., Tobey, I.S., & Collier, G.A. (1969). Infant development  
in the Zinacanteco Indians of Southern Mexico. *Pediatrics*, 44, 274-  
283.
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.

- Bruner, J., Roy, C., & Ratner, N. (1982). The beginnings of request. *Children's Language*, **3**, 91-138.
- Camras, L. A., Oster, H., Campos, J. J., Miyake, K., & Bradshaw, D. (1992). Japanese and American infants' responses to arm restraint. *Developmental Psychology*, **28**(4), 578-583.
- Camras, L. A., Oster, H., Campos, J., Campos, R., Ujiie, T., Miyake, K., Wang, L. & Meng, Z. (1998). Production of emotional facial expressions in European American, Japanese, and Chinese infants. *Developmental Psychology*, **34**(4), 616.
- Caudill, W., & Weinstein, H. (1969). Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, **32**, 12-43.
- Chen, X., Hastings, P. D., Rubin, K. H., Chen, H., Cen, G., & Stewart, S. L. (1998). Child-rearing attitudes and behavioral inhibition in Chinese and Canadian toddlers: A cross-cultural study. *Developmental Psychology*, **34**(4), 677.
- Chen, X., Rubin, H. K., Liu, M., Chen H., Wang, L., Li, D., Gao, X., Cen, G., Gu, H., & Li, B., (2003). Compliance in Chinese and Canadian toddlers: A cross-cultural study. *International Journal of Behavioral Development*, **27**(5), 428-436.
- Cole, P. M., & Dennis, T. A. (1998). Variations on a theme: Culture and the meaning of socialization practices and child competence. *Psychological Inquiry*, **9**, 276-278.
- 大坊郁夫・上出寛子・村澤博人・趙鏞珍・毛新華・高橋直樹 (2007). 顔形態特

徴の日中韓比較(1)－顔面表情に伴う顔形態の文化比較 電子情報通信学会, **33** (44), 13-18.

- Darwin, C. (1965). *The expression of emotions in man and animals*. University of Chicago Press. London, UK: John Marry. (Original work published 1872)
- Deluty, R.H. (1979). Children's action tendency scale : A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **47**, 1061-1071.
- Deng, X., You, Y., & Sai, L. (2019). Subcultural Differences in processing social and non-social positive emotions between Han and Uygur Chinese: An ERP Study. *Frontiers in Psychology*, **10**, 2041, 1-12.
- Disney. (2011). *Fantasia*.
- Eid, M., & Diener, E. (2001). Norms for experiencing emotions in different cultures: Inter-and intranational differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**(5), 869-885.
- Ekman, P. (1972). Universals and cultural differences in facial expression of emotion. *Nebraska Symposium on Motivation*, Lincoln: University of Nebraska Press, pp. 207-283.
- Ekman, P. (1984). Expression and the nature of emotion. *Approaches to Emotion*, **3**, 19-344.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1971). Constants across culture in the face

- and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **17**, 124-129.
- Ellis, A. (1976). *Reason and emotion in psychotherapy*. New York: Lyle Stuart.
- Enesco, I., Sebastián-Enesco, C., Guerrero, S., Quan, S., & Garijo, S. (2016). What makes children defy majorities? The role of dissenters in Chinese and Spanish preschoolers' social judgments. *Frontiers in Psychology*, **7**, 1695, 1-13.
- Fasel, B., & Luetttin, J. (2003). Automatic facial expression analysis: A survey. *Pattern Recognition*, **36**(1), 259-275.
- Fogel, A., Toda, S., & Kawai, M. (1988). Mother-infant face-to-face interaction in Japan and the United States: A laboratory comparison using 3-month-old infants. *Developmental Psychology*, **24**(3), 398.
- Freedman, D. G. (1976). Infancy, biology, and culture. In L. P. Lipsitt (Ed.), *Developmental psychobiology: The significance of infancy*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.33-45.
- Freedman, D. G., & Freedman, N. C. (1969). Behavioural differences between Chinese-American and European-American newborns. *Nature*, **224**, 1227.
- Fu, J. (2015) 困難なパズル課題に対する子どもの行動-文化差の視点から  
臨床発達心理学研究, **6**, 3-16.
- Fu, J. (2018) パズル課題に対する子どもの行動の違いー日本と中国の比較  
人間環境学研究, **16**(1), 51-56.

- Fu, G., Heyman, G. D., Cameron, C. A., & Lee, K. (2016). Learning to be unsung heroes: Development of reputation management in two cultures. *Child Development*, **87**(3), 689-699.
- 藤永 保 (1997). 愛着システムの5国比較文化の研究 教育研究 **39**, 1-31.
- Gagne, R.M., & Smith, E.C., (1962). A Study of the effects of verbalization on problem solving. *Journal of Experimental Psychology*, **63**, 12-18.
- Garrett-Peters, P. T., & Fox, N. A. (2007). Cross-cultural differences in children's emotional reactions to a disappointing situation. *International Journal of Behavioral Development*, **31**(2), 161-169.
- Gao, G., & Ting-Toomey, S. (1998). *Communication effectively with the Chinese*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Geertz, C. (1973). *The interpretation of culture: Selected essays*. New York: Basic Books.
- Gudykunst, W. B., & Ting-Toomey, S. (with Chua, E.) (1988). *Culture and interpersonal communication*. Newbury Park: CA Sage.
- Hall, E.T (1977). *Beyond Culture*, New York: Anchor Books.
- 濱口 佳和 (1994). 児童用自己主張尺度の構成 教育心理学研究, **42**, 463-470.
- Hatzigeorgiadis, A., Zourbanos, N., Mpoupaki, S., & Theodorakis, Y. (2009). Mechanisms underlying the self-talk-performance relationship: The effects of motivational self-talk on self-confidence and anxiety. *Psychology of Sport and Exercise*, **10**(1),

186-192.

Heine, S. J., Kitayama, S., & Lehman, D. R. (2001). Cultural differences in self-evaluation: Japanese readily accept negative self-relevant information. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **32**(4), 434-443.

Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1995). Cultural variation in unrealistic optimism: Does the West feel more vulnerable than the East?. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**(4), 595.

ヘンリック (Henrich, J.) 著 今西 康子 役 (2019) 文化がヒトを進化させた一人類の繁栄と〈文化-遺伝子革命〉白揚社 *The secret of our success: How learning from others drove human evolution, domesticated our species, and made us smart* (2016). Princeton University Press

法務省 (2019) 平成 30 年末現在における在留外国人数 <http://www.moj.go.jp/content/001289225.pdf> (2019 年 3 月 22 日)

Immordino-Yang, M. H. (2010). Toward a microdevelopmental, interdisciplinary approach to social emotion. *Emotion Review*, **2**(3), 217-220.

Immordino-Yang, M. H., Yang, X. F., & Damasio, H. (2016). Cultural modes of expressing emotions influence how emotions are experienced. *Emotion*, **16**(7), 1033.

Izard, C. E. (1979). *The maximally discriminative facial movement coding system (Max)*. Instructional Resources Center University of Delaware.

Izard, C. E. (1993). Four systems for emotion activation: Cognitive and noncognitive processes. *Psychological Review*, **100**(1), 68-90.



- Jack, R. E., Blais, C., Scheepers, C., Schyns, P. G., & Caldara, R. (2009). Cultural confusions show that facial expressions are not universal. *Current Biology*, **19**(18), 1543-1548.
- Jack, R. E., Sun, W., Delis, I., Garrod, O. G., & Schyns, P. G. (2016). Four not six: Revealing culturally common facial expressions of emotion. *Journal of Experimental Psychology: General*, **145**(6), 708-730.
- Jahoda, G. (1992). *Cross-road between culture and mind: Continuities and change in theories of human nature*. London: Harvester Wheatsheaf.
- 柏木 恵子 (1988). 乳児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会.
- 柏木 恵子・北山 忍・東 洋 (1997). 文化心理学—理論と実証 東京大学出版社.
- Kawakami, K., Takai-Kawakami, K., & Kanaya, Y. (1994). A longitudinal study of Japanese and American mother-infant interactions. *Psychologia: An International Journal of Psychology in the Orient*, **37**, 18-29
- 木下 孝司 (1987) . 乳幼児期における要求伝達手段の調整過程 教育心理学研究, **35**, 351-356.
- 北山 忍 (1994). 文化観と心理的プロセス 社会心理学研究, **10**(3), 153-167.
- Kitayama, S. & Markus, H.R. (1994). *Emotion and culture: Empirical*

- studies of mutual influences*. Washington D.C.: American Psychological Association Press.
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: Good feelings in Japan and the United States. *Cognition & Emotion*, **14**(1), 93-124.
- Kitayama, S. & Masuda, T. (1995). Reappraising cognitive appraisal from a cultural perspective. *Psychological Inquiry*, **6**, 217-223.
- 久米 昭元・徳井 厚子・徐 一平 (2000). 「コミュニケーション様式の日米中比較研究-小集団討論の質的分析を通して-」研究代表者井上和子『先端的语言理論の構築とその多角的な実証(4-B)』(平成8年度COE形成基礎研究費研究成果報告4) . 625-672.
- Lee, C. W. (2002). Referent role and styles of handling interpersonal conflict: Evidence from a national sample of Korean local government employees. *International Journal of Conflict Management*, **13**, 127-141.
- Lee, H.O., & Rogan, R.G. (1991). A cross-cultural comparison of organizational conflict management behaviors. *International Journal of Conflict Management*, **2**, 181-199.
- Lewis, M., Alessandri, S. M., & Sullivan, M. W. (1990). Violation of expectancy, loss of control, and anger expressions in young infants. *Developmental Psychology*, **26**(5), 745-751.
- Lewis, M., Alessandri, S.M., & Sullivan, M.W. (1992). Differences in shame and pride as a function of children's achievement expectancies.

- Child Development*, **63**, 630-638.
- Lewis, M., & Ramsay, D. (2002). Cortisol response to embarrassment and shame. *Child Development*, **73**, 1034-1045.
- Lewis, M., Ramsay, D. S., Kawakami, K. (1993). Differences between Japanese infants and Caucasian American infants in behavioral and cortisol response to inoculation, *Child Development*, **64**, 1722-1731.
- Lewis, M., & Sullivan, M.W. (2006). The development of self-conscious emotions. In A. Elliot & C. Dweck (Eds.), *Handbook of competence and motivation*. New York: Guilford Press. pp. 185-201.
- Lewis, M., Takai-Kawakami, K., Kawakami, K., Sullivan, M. W. (2010). Cultural differences in emotional responses to success and failure. *International Journal of Behavioral Development*, **34**, 53-61.
- Li, J., & Wang, Q. (2004). Perceptions of achievement and achieving peers in US and Chinese kindergartners. *Social Development*, **13**(3), 413-436.
- Lim, N. (2016). Cultural differences in emotion: Differences in emotional arousal level between the East and the West. *Integrative Medicine Research*, **5**(2), 105-109.
- Loewen, S., & Philp, J. (2006). Recasts in the adult L2 classroom: Characteristics, explicitness, and effectiveness. *Modern Language Journal*, **90**, 536-556.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**,

224-253.

- Maruyama, H., Ujie, T., Takai, J., Takahama, Y., Sakagami, H., Shibayama, M., Fukumoto, M., Ninomiya, K., Ah, P. H., Feng, X., Takatsuji, C., Hirose, M., Kudo, R., Shima, Y., Nakayama, R., Hamaie, N., Zhang F., & Moriizumi S. (2015). Cultural difference in conflict management strategies of children and its development: Comparing 3- and 5-Year-olds across China, Japan, and Korea. *Early Education and Development*, **26**, 1210-1233.
- Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically versus analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**(5), 922.
- Matsumoto, D. (2018) Time to rethink the common view. *Asian Journal of Social Psychology*, **21**, 4, 324-330.
- Matsumoto, D., Yoo, S. H., & Nakagawa, S. (2008). Culture, emotion regulation, and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **94**(6), 925.
- Maynard, S. (1997). *Japanese communication: Language and thought in context*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Meichenbaum, D. (1977). *Cognitive-behaviour modification: An integrative approach*. New York: Plenum Press.
- Mesquita, B., & Frijda, N. H. (1992). Cultural variations in emotions: A review. *Psychological Bulletin*, **112**(2), 179.
- Metro-Goldwyn-Mayer. (1999). Tom and Jerry.

- Miller, J. G. (1994a). Cultural diversity in the morality of caring: Individually oriented versus duty-based interpersonal moral codes. *Cross-cultural research: The Journal of Comparative Social Science*, **28**, 3-39.
- Miller, J. G. (1994b). Cultural psychology: Bridging disciplinary boundaries in understanding the cultural grounding of self. In P. K. Bock (Ed.), *Handbook of Psychological Anthropology*. Westport, CT: Greenwood. pp. 139-170.
- Miller, J. G., & Bersoff, D. M. (1994). Cultural influences on the moral status of reciprocity and the discounting of endogenous motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 592-602.
- 南 徹弘 (2007). 心理学における行動発達 南 徹弘 (編集) 発達心理学 朝倉書店 pp. 1-11.
- Miyamoto, Y., Yoo, J., Levine, C. S., Park, J., Boylan, J. M., Sims, T., Markus, H. R., Kitayama, S., Kawakami, N., Karasawa, M., Coe, C. L., Love, G. D. & Ryff, C. D. (2018). Culture and social hierarchy: Self-and other-oriented correlates of socioeconomic status across cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **115**(3), 427.
- Morling, B. (2000). “Taking” an aerobics class in the US and “entering” an aerobics class in Japan: Primary and secondary control in a fitness context. *Asian Journal of Social Psychology*, **3**(1), 73-85.
- Morling, B., Kitayama, S., & Miyamoto, Y. (2002). Cultural practices emphasize influence in the United States and adjustment in Japan.

*Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**(3), 311-323.

Nishimura, S., Nevgi, A., & Tella, S. (2008). Communication style and cultural features in high/low context communication cultures: A case study of Finland, Japan and India. *Teoksessa A. Kallioniemi (toim.), Uudistuva ja kehittyvä ainedidaktiikka. Ainedidaktinen Symposiumi*, **8**(2008), 783-796.

村瀬 孝雄 (1996). 内観一理論と文化関連性 誠信書房.

村山 健二 (2019). 日本人と中国人、韓国人の行動の違い・・・これで見分けられるらしい=中国メディア *Livedoor News* <https://news.livedoor.com/article/detail/16797465/> より引用

Ng, F.F., Pomerantz, E.M., & Lam, S. (2007). European American and Chinese parents' responses to children's success and failure: Implications for children's responses. *Developmental Psychology*, **43**, 1239-1255.

Oetzel, J., & Ting-Toomey, S. (2003). Face concerns in interpersonal conflict: A cross-cultural empirical test of the face negotiation theory. *Communication Research*, **30**, 599-624.

Parkinson, B., Fischer, A. H., & Manstead, A. S. (2005). *Emotion in social relations: Cultural, group, and interpersonal processes*. New York: Psychology Press.

佐藤 淑子 (2001). イギリスのいい子 日本のいい子—自己主張とがまんの教育学 中公新書.

Shimoda, K., Argyle, M., & Bitti, P. R. (1978). The intercultural

- recognition of emotional expressions by three national racial groups: English, Italian and Japanese. *European Journal of Social Psychology*, **8**, 169-179.
- Shweder, R.A. (1991). *Cultural psychology: Thinking through cultures*. Cambridge: Harvard University Press.
- 島田・後藤・島田・保坂 (2001). ヒト胎児の顔面表情筋と顔面神経分布について 昭和医会誌, **61**, 322-332.
- Stipek, D., Recchia, S., McClintic, S. & Lewis, M. (1992). Self-evaluation in young children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **57**, 1-95.
- Suveg, C., Raley, N. J., Morelen, D., Wang, W., Han, Z. R., Champion, S. (2014). Child and family emotional functioning: A cross-national examination of families from China and the United States. *Journal of Child and Family Studies*, **23**, 1444-1454.
- 鈴木 亜由美 (2010). 幼児における自己主張行動の発達の研究—3~4歳児の縦断的観察からの検討 発達研究, **24**, 85-93.
- 高野 陽太郎 (2008). 集団主義という錯覚：日本人論の思い違いとその由来 新曜社.
- Takano, Y., & Osaka, E. (1999). An unsupported common view: Comparing Japan and the US on individualism/collectivism. *Asian Journal of Social Psychology*, **2**(3), 311-341.
- 高坂 聡 (1996). 幼稚園児のいざごごに関する自然観察的研究：おもちゃを取るための方略の分類 発達心理学研究, **7**, 62-72.

- Thomson, R., Yuki, M., Talhelm, T., Schug, J., Kito, M., Ayanian, A. H.,  
Becher, J. C., Becker, M., Chiu, C., Choi, H., Ferreira, C. M.,  
Fülöp, M., Gul, P., Houghton-Illera, A. M., Joasoo, M., Jong, J.,  
Kavanagh, C. M., Khutkyy, D., Manzi, C., Marcinkowska, U. M., Milfont,  
T. L., Neto, F., Oertzen, T., Pliskin, R., Martin, A. S., Singh, P.,  
& Ferreira, C. M. (2018). Relational mobility predicts social  
behaviors in 39 countries and is tied to historical farming and  
threat. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, **115**(29),  
7521-7526.
- Ting-Toomey, S., & Kurogi, A. (1998). Facework competence in  
intercultural conflict: An updated face-negotiation theory.  
*International Journal of Intercultural Relations*, **22**, 187-225.
- Tinsley, C. H., & Weldon, E. (2003). Responses to a normative conflict  
among American and Chinese managers. *International Journal of Cross  
Cultural Management*, **3**(2), 183-194.
- Tomkins, S. S. (1962). Affect, imagery and consciousness: *Vol. 1. The  
positive affects*. New York: Springler publishing company.
- Tsai, J. L., Levenson, R. W., & McCoy, K. (2006). Cultural and  
temperamental variation in emotional response. *Emotion*, **6**(3), 484-  
497.
- White, B. L., & Watts, J.C. (1973). *Experience and environment: Major  
influences on the development of the young child* NJ: Prentice-Hall.
- Wu, M. S., Li, B., Zhu, L., & Zhou, C. (2019). Culture change and



- affectionate communication in China and the United States: Evidence from Google digitized books 1960-2008. *Frontiers in Psychology*, **10**, 1110, 1-8.
- 山田 洋子 (1982). 0~2 歳における要求一拒否と自己の発達 教育心理学研究, **30**, 38-47.
- 山本 愛子 (1995). 幼児の自己調整能力に関する発達的研究-幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について- 教育心理学研究, **43**, 42-51.
- Yan, X., Andrews, T. J., & Young, A. W. (2016). Cultural similarities and differences in perceiving and recognizing facial expressions of basic emotions. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, **42**(3), 423, 1-55.
- 吉田 隆 (2011). 中国人はなぜうるさいのか 講談社.
- Zahn-Waxler, C., Friedman, R. J., Cole, P. M., Mizuta, I., Hiruma, N. (1996). Japanese and United States preschool children's responses to conflict and distress. *Child Development*, **67**, 2462-2477.
- 張 麗 (2009). 「話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル」——小集団ディスカッションを通して」 異文化コミュニケーション論集, **7**, 147-159
- Zinsser, N., Bunker, L., & Williams, J. M. (2006). Cognitive techniques for building confidence and enhancing performance. *Applied Sport Psychology: Personal Growth to Peak Performance*, **5**, 349-381.

## 謝辞

本博士論文を作成するにあたり、多くの方々に支えられ、完成することができました。お世話になった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、日本東京の保育園、韓国近畿道の保育園と中国上海の保育園の先生方や、子どもたちに深く感謝申し上げます。

本論文を執筆するにあたり、学部時代を含め約8年以上、ご指導を頂いた川上清文教授に心から厚く御礼申し上げます。いつも不出来な私の短所を明確に指摘していただき、学問の道だけではなく、人生においても勉強になりました。途中何度も先生を呆れさせてしまったこともありました。心から深く感謝を申し上げます。

研究方法、分析方法について鋭いご指摘と親身なご指導を賜りました高橋雅延先生、永井淳一先生に心より御礼申し上げます。柴田玲子先生、向井隆代先生、神前裕子先生から、臨床心理の視点により貴重な御意見と温かい励ましをいただき、成長することができ、数々の貴重なご意見を頂戴いたしましたことを重ねてお礼申し上げます。

聖心女子大学の岸本健先生、佐々木正宏先生、早稲田大学の青柳肇先生には、大変ご多忙の中、副査として拙論を査読し、多様な視点から鋭いご指摘、貴重な示唆を賜りましたことを大変光栄に思っております。

心理研究室の目黒さんと関根さんは、いつも応援してくださり、感謝の念をお伝えさせて頂きます。

また、お忙しい中で、本研究に協力してくださったお子様、保護者の方、聖心女子大学の院生たちにも感謝を申し上げます。皆さんのお陰で、今回の研究を進

め、国や文化での違いによる多くの刺激と示唆を得ることができました。

ここでは割愛されていただきましたが、これまでご支援いただきました多くの方々に心から御礼申し上げます。

そして最後に、私の支えとなり、いつも応援してくれた家族に心から感謝し、本論文を捧げたいと存じます。

2020年1月24日

Jiahui Fu